

応永本『和泉式部物語』注釈稿(2)

——(7)「翌朝、いとめづらかにて」(12)「またの夜おはしましける」——

渡辺 開 紀
渦 卷 恵
金 井 利 浩
山 下 太 郎
松 島 毅

凡 例

一、前稿「応永本『和泉式部物語』注釈稿(1)」(「國學院大學北海道短期大学紀要」41、二〇二四・3↓【注釈稿(1)】)に同じ。京都大学蔵『和泉式部物語』(臨川書店・一九七八↓【臨川】)所収の影印および翻刻を底本とし、範囲は、一四六―一六五頁とする。

二、執筆担当は次の通りである。

7 「翌朝、いとめづらかにて」…渦 卷 恵 8 「あはれにものを思ふほどに」…金井利浩 9 「おはしまさむと思して」…渡辺開紀
10 「からうしておはして」…渡辺開紀 11 「かろがろしき歩きなど」…山下太郎 12 「またの夜おはしましける」…松島 毅

(7) 翌朝、いとめづらかにて

〔本文〕

翌朝、^{1つとめて}「いとめづらかにて明かしつる」などのたまはせて、

²いさやまだかかる思ひを知らぬかな逢ひても逢はで明くるものとは

³あさまし」とあり。あさましきさまに思しつらむと、いとほしくて、

⁴世とともにもの思ふ人は夜^{よる}とてもうちとけて目の合ふ時^{とき}もなし

⁵めづらかにも思えはべらず」と聞こえつ。

⁶またの日、「今日やものに出でたまふ。いつか帰^{かへ}りたまふ。いかにましておぼつか^{*}なからむ」とあれば、

⁸折過ぎばさてもこそやめ五月雨^{さみだれ}の今宵^{あやめ}菖蒲^{あやめ}の根をや引かまし

⁹とこそ思ひたまへ返りぬべけれ」と聞こえて、¹⁰詣^{まう}でて、三日ばかりありて帰^{かへ}りたれば、「参^{まゐ}りて、と思ふを、いと心憂^{こころな}かりしにこそ、もの憂

¹²く恥づかしう思えて、いとおろかなるものに思されぬべけれ、日^ひごろは、

¹³つられど忘れやはするほどふればいと恋しきに今日は負けなむ

¹⁴浅^あからぬ心のほどを、さりととも」とあれば、

¹⁵負^おくるとも見えぬものから玉葛^{たまかづら}とふ一筋も絶え間^まがちにて

¹⁶と聞こえたり。

¹⁷宮、例の忍びておはしましたり。女、さしもやと思ふうちに、日^ひごろの行^{おこな}ひに苦^{くる}しうてうちまどろみたるほどに、¹⁹門叩^{かど}くを聞きとがむる

人もなし。聞^{きこ}こしめすこともあれば、人などのあるにやと思しめして、^{*}やをら帰^{かへ}らせたまひぬ。

²⁰翌朝、^{2つとめて}

²¹開けざりし真木の戸口に立ちながらつらき心のためしとぞ見し

²²憂^{*}きはこれにやと思ふにもあはれになむ」とあり。²³昨夜^{よる}おはしましけるなめり、心なくも寝入りにけるかな、と思ひて、

²⁴いかにかは真木の板戸もさしながらつらき心のありなしは見む

推し量らせたまふべかめるこそ。見せたしは²⁵とあり。今宵もおはしまさまほしけれど、かかる御歩^{あり}きを人々も制し聞こゆるを、とかく宮な
どの聞こしめさむこともかなしきやうなりと、思いつつむほどに、いとはるかなり。

〔臨川〕八ウゝ十一オ／一四六／一四八頁

〔校訂〕＊おほつかならむ―（京）「おほつかならむ」を（書）「おほつかならむ」に拠り改める。

＊やをら―（京）「やをし」を（書）「やをら」に拠り改める。

＊憂きはこれにや―（京）「うきはすれにや」の「す（春）」は「こ（古）」の誤りとみて改める。

〔応永本校異〕（京）おほえ侍らすと―（書）出給ふいつか（京）おほつかならむ―（書）おほつかならむ（京）やをし―（書）やをら

（京）よへおはしましけるなめり―（書）よへおはしましたりけるなめり（京）うきはすれにや―（書）うきわすれにや

（京）みせたしは―〔注釈〕25参照。

〔三条西本〕【清水】21／24頁　〔参考〕【本文篇】一二／一六頁・【本文集成】81／105頁

〔和歌他出〕16 「いさやまだ」歌―ナシ　17 「世とともに」歌―ナシ　18 「折過ぎば」歌―ナシ　19 「つらけれど」歌―ナシ

20 「負くるとも」歌―ナシ　21 「開けざりし」歌―ナシ　22 「いかにかは」歌―ナシ

〔現代語訳〕

翠朝、「たいそう珍しい具合で夜を明かしてしまった」などおっしゃって、

いやはや今までにこのような思いをしたことなどありませんよ。逢っているのに逢わないままで（夜が）明けるなんて。

あきれたことです」と手紙があった。さぞあきれた態度だと思いいになっただろうと、気の毒で、

いつもいつももの思いをしている人は、夜だといってもくつろいでまぶたが合う時もないことです。

珍しくも思われません」と申し上げた。

翌日、「今日は物語にお出かけになるのですか。いつお帰りになりますか。どれほど一層待ち遠しいことでしょう」とあるので、
時期が過ぎてしまったら節句は何もせずに終わってしまつて残念です。五月雨の降る今宵、菖蒲の根を引こうかしら（私たちの間柄もそ
のように機会をのがしてしまつては残念だから、今宵、こちらに残つてお逢いしようかしら）。

というふうに思いが翻つてしまふでしょう」と申し上げて、参詣して、三日ほど経つて帰つたところ、「お伺いして、と思うのですが、まことに心中情けなかつた一件で、気が進まず氣後れするように感じられて、随分いい加減な男だとお受け止めいただいたに違いありませんが、ここ数日来は、

つらいけれども、あなたへの思いを忘れるはずがありません。こうして時間が経つと、あまりにも恋しいので、ついに今日は根負けしそうです。

浅くない思いのほどを、そうはいつでも」とあるので、

負けるとも、そして、来るとも思えませんが。手繰る玉葛の一筋のような、わずかな消息でさえも途切れがちなのですから。と申し上げた。

宮は、いつものように忍んでおいでになった。女は、そのようなことなどあるわけないと思つているうちに、数日来の勤行に疲れてうとうとしていたところで、(宮のお供が) 門を叩く音を聞きつける人もいない。(宮は) お耳にされていた噂もあるものだから、他の男でもいるのかとお思ひになつて、そつとお歸りになつた。翌朝、

あなたが開けなかつた真木の戸の前で立ち尽くしたまま、(私がこんな目に遭うことが) あなたの冷淡なお心の何よりの証なのだと見たことですよ。

つらいとはこういうことなのかと思うにつけてもみじめで」と便りがある。昨夜(宮は) おいでになつたらしい、うかつにも寝入つてしまつたことだよ、と思つて、

どうやって、真木の板戸も閉めたそのままで、私に薄情な心があるかないかなど、おわかりになりましたか。

何やら想像なさつていよう。心の中をぜひお見せしたいものですわ」と書いた。(宮は) 今夜もおいでになりたくお思ひになるが、このようなお忍び歩きを人々もお止め申すので、あれこれ宮様などがお耳にするであろうことも心が痛むことだと、お慎みになる間に、だいぶ日数が経つてしまふ。

〔注釈〕

1・翌朝、^{つとめて}「いとめづらかにて明かしつる」などのたまはせて、「翌朝」^{つとめて}は、女が精進を理由に宮を拒絶したまま一晩明かした翌朝のこと

【注釈稿(1)】の(6)。「めづらか」は、普通と異なっているさま。ここは、宮が女を訪ねたのに、契りを結ぶこともないまま夜を明かしたことをいう。【考注】は「めづらか」は普通には「珍らか」であるが、当時のかうした男女の応答には一種の皮肉を加味した特別のニュアンスがある。「ためしのない、あきれた」といふ意を含ませてゐる」と注し、『源氏』「総角」(⑤二六五頁)の用例を挙げる。

2・いさやまだかかる思ひを知らぬかな逢ひても逢はで明くるものとは「いさや」は、「いやはやなんとも……」の意。口語的表現ではあるものの、諸注が指摘するように「いさやまだ恋てふことも知らなくにこやそなるらむいこそ寝られね」(拾遺集・八九六・恋四・よみ人しらず／古今六帖・一九七四)などと用いられ、『和泉式部集』にも「いさやまだかはりも知らず今こそは人の心を見てもならはめ」(二二一)と詠まれる。「いさやまだ……知らず」という表現は、ある程度流行した表現と認められよう。二句目「かかる思ひを」の「ひ」は「日」を掛け、結句「明くる」の縁語となる。「日／草も木も思ひしあれば出づる日の明け暮れこそは頼むべらなれ」(貫之集・七〇七)。三条西本では「かかる道をば」、寛元本では「かかる恋をば」。四句目について、諸注は「世の中に忍ぶる恋のわびしきは逢ひての後の逢はぬなりけり」(後撰集・五六四・恋一・よみ人しらず)を挙げるが、これは「逢った後に逢わなくなる」例。作中歌のように「逢ふ」という動詞を、「お目にかかる」と「男女の関係を持つ」の意に詠み分ける例は少ない。男が来たものの親の制止のために逢えなかったことを詠んだ「逢ふことの逢はぬ夜ながら明けぬれば我こそ帰れ心やはゆく」(伊勢集・五二)が参考になろう。『平中物語』(二七段)には「たまさかに聞けと調ぶる琴の音のあひてもあはぬ声のするかな」とも。ちなみに『源氏』「東屋」の「宮も、逢ひても逢はぬやうなる心ばへにこそ」の箇所にも、『全集』頭注は、この帥宮詠を引く。結句は、二句目「思ひ」の「日」と呼応する。下句は、女と共寝をしないまま時が過ぎ、夜が明けて、こんな一日を迎えようとは、と解することもできるか。三条西本・寛元本は「明かすものとは」。女と共寝をしないまま夜を明かすことになるとは、と動作の主体は宮となる。さて、下句「あ・あ・あ」の頭韻は、追而書の「あさまし」にも繋がる。主人公の拒絶に対抗しうる、いい出来の歌である。

3・あさまし」とあり。あさましきさまに思しつらむと、いとほしくて、「あさまし」は、「あきれたこと」「興ざめである」と、あきれた事態であることをいう。「逢ひても逢はで明くるものとは、あさまし」と歌から地の文へと繋がる、歌文融合のかたち。宮は、女に一晚中無視された、ありえない「めづらか」な状況を、あきれたこと、と責めたのであろう。女は、「宮が本当にそうお感じになっただろうな」と思いやり、「いとほし」と、気の毒に思ふのである。なお【最新】は「あさまし」を「なさけないしだいですよ」と訳す。【笠間】は、「あきれた

ものだ」と言っておよこしになる。さぞひどい目に逢ったとお思いになったろうと気の毒で」と、宮が逢えなかった状況を「あさまし」と言ったのに対し、女のほうは、宮がひどい目に逢ったこととして気の毒がる、というふうな「あさまし」の意味を転換して訳出している。

4・世とともにもの思ふ人は夜^よとてもうちとけて目の合ふ時もなし「世とともに」は、いつもいつも、の意。「世」は下の句「夜」と対をなす。「もの思ふ人」は、世間一般の物思いをする人の意であるが、ここは、自分自身をいうのであろう。先の女からの歌「よとともにぬるとは袖を思ふにものどかに夢を見る宵ぞなき」〔注釈稿（1）〕の（4）に表現も内容も重ねながら、宮歌の「逢ふ」を「まぶたが合ふ」、すなわち眠る意に転換して返歌とする。「目合ふ」は用例が少なく、特異な表現。「恋しさは寝ぬに慰むともなきにあやしく合はぬ目をもみるかな」（後撰集・六七・恋二・源浮）。作中では、宮が「冬のよのこひしきことにめあはて衣かたしきあけそしにける」（臨川）一九六頁）と詠むほか、「和泉式部集」にも「夏の夜は照射^{ともし}の鹿の目をだにも合はせぬほどに明けぞしにける」（三三）とある。「目の合ふ」について、【詳解】以下、諸注は「女（妻）の逢ふ」との掛詞とする。しかし、「もの思ふ人」は、ここでは女を指すと考えられるため、「もの思ふ人」は、女（妻）が逢ふ時がない」では意味が通じない。「妻（女）の逢ふ」の「の」を、～として、の意とするのも、文法的に不可解。

5・めづらかにも思えはべらず」と聞こえつ。「めづらか」は、宮の手紙を承けた言葉。自分を含めて一般的に「もの思ふ人」は、夜眠れないものなのだから、寝ない夜は「めづらか」ではないというのである。もの思いもなくぐっすり寝てしまうのは「寝汚なし」と揶揄されるべきこと、というのが当時の感覚。作中にも「いきたなし（＝寝汚なし）とおほしぬらんこそ思はぬさまなれ」（臨川）一六六頁）とある。なお、「思えはべらず」との箇所は、書陵部本では「出給ふいつか」とある。次の行の目移りによる誤写であろう。

6・またの日、「今日やものに出でたまふ。いつか帰りたまふ。五月一日には宮は歌を寄こしただけで、三日後に女の家を訪ね、その日は何事もなく帰って、翌日に先のやり取りがあった。その翌日、というので、「三日後」を、一日を含めた三日だとすれば、「またの日」は五月五日ということになる。一日を含めずに数えたと六日ということになるが、続く歌には「折過ぎば」と仮定法が用いられているため、不自然。なお、五月六日の日付については、後段の（8）参照。

7・いかにましておぼつか^{*}なからむ」とあれば、底本「おぼつかならん」を書陵部本により校訂した。「まして」は、なおのこと一層。「おぼつかなし」は、ここは、待ち遠しい、逢いたいという気持ち。「あやしきまで、今朝のほど昼間の隔てもおぼつかなくなど思ひわづらはれたまへば」（源氏）夕顔。寺に籠ってしまつたら、今までにましてどんなにか待ち遠しい気持ちになるかと、愛情を素直に訴える。

8・折過ぎばさてもこそやめ五月雨の今宵菖蒲の根をや引かまし 宮からの手紙に対して、歌で返事をする。「折」は、ここでは五月五日の節日のこと。『枕草子』『節は』に見えるように、当日は宮中のみならず、庶民の家の屋根にも薫り高い菖蒲が葺かれ、邪気を払ったようである。「折過ぎば」は、もし時期が過ぎてしまったなら、の意。通常、仮定の接続助詞「ば」は、「……なら……だろう」と、推量の助動詞を伴って仮定条件に対する予想を示す。ここは「今日過ぎば、この月は日もなし、九十月はいかではとて仕まつらせつるを」（『源氏』東屋）のように、推量の表現を用いない例。他本は「折過ぎて」。「さてもこそやめ」の「もこそ」は、「くしたら大変だ、気がかりだ」と危惧する気持ちを表す慣用的表現。「時期を逃したならば、節句は何もせずに終わってしまう。そのように何事もなく二人の仲が終わってしまったら大変だ」ということであろう。「もこそ」を単純に係助詞が重なった強調表現として「時期が過ぎたらそのようにも（五月雨は）やみ、節句は何もせずに終わる」とも解せるか。「やめ」は「五月雨」の縁で用いた表現。「五月雨の今宵」については、【考注】が『本朝世紀』により長保五年五月十日までは「天晴」であったことを指摘して、作品と史実に齟齬があることを明らかにし、作者の記憶違いによる可能性を示している。また、吉田『研究』は、「五月雨」が、天気でなく「五月」そのものの言い換えだとし、『蜻蛉』中巻安和二年五月の記事「五月雨の二十余日のほど」を例に挙げて、「五月雨の」とある応永本本文が原歌であると推定する。ただし、『蜻蛉』該当箇所は大雨の場面で「五月雨」五月とは断定できない。なお、三条西本、寛元本の第三句は「さみだれて」とあり、その場合は「五月雨」に「さ乱れ」が掛かっている。結句は、節句の当日用いる菖蒲の根を引く習慣を踏まえた表現。「五月五日、菖蒲の根を清少納言にやるとて／これぞこの人の引きける菖蒲草むべこそねやのつまとなりけれ」（和泉式部集・五二九）。ここは、「今宵」とあるところから、暗に「根」に「寝」を響かせているか。なお、三条西本、寛元本の五句は「ねをやかけまし」。菖蒲の根を掛けると詠む例に「ぬるが上に菖蒲の草のねを掛けて今日ぞ袂の朽ちは果てぬる」（道命阿闍梨集・二八六）などがあるが、「泣く音」に言い掛ける。ここは、「引かまし」のほうがふさわしい。助動詞「まし」は、思い迷う意。この一首に女がどのような思いを込めたかは諸説あるものの【竹野】【全集】ほか、諸説整理は【全講】を参照）、ここでは、宮が女への情を訴えてきたのに対し、自分も参詣を取りやめてしまおうかと思ひ直し、迷ってしまふ、と返答したと解しておく。

9・とこそ思ひたまへ返りぬべけれ」と聞こえて、三条西本は「とこそ思ひ給ふべかりぬべけれ」。「思ひ給へ返り」は、思い直す意の複合動詞「思ひ返る」の間に下二段謙譲の補助動詞連用形「給へ」を挟むかたち。「かしこにいと切に見るべきことのはべるを、思ひ給へ出でてなむ。立ちかへり参り来なむ」（『源氏』若紫）。また、思い直す意の「思ひ返る」は「かく言ひちぎりつれば思ひ返るべきにもあらず」（『蜻

蛸」下・天禄三年）など。「べけれ」は「こそ」の結び。【川瀬】は、「給へ」を宮に対する敬語とし、「とこそ思ひ給へ、返りぬべけれ」と区切って「というふうにお考え下さいまして、お返事をいただきたいものです」と訳す。【由良】【新訳】は、「返りぬべけれ」に「返りぬべけれ」の字を当て、「こう存じまして、きつと時期を過ぎさず帰ってまいりましょう」と訳出するが、採らない。三条西本を底本とする【新註】は、「とこそ思ひ給ふべかりぬべけれ」を「この歌のような情熱的な御心であっていただきたい」と訳し、「この歌は式部が希望する宮の熱情を一気に表現したもの」と、宮の立場に立って詠んだ歌と解して、和歌を「このまま時が過ぎては二人の仲が絶えてしまふ、かうしておけないから、今夜は五月雨が降りかかるやうに訪れて行かう」と宮の立場で訳す独自注である【笠間】が追認。

10・詣^{まう}でて、三日ばかりありて帰れたれば、宮とのやり取りに、心を動かされながらも、やはり女は寺に参詣し、三日ほどしてから戻る。四月つごもりに女から宮に誘いかけの歌を贈って以来、「つごもりの日」「つとめて」「三日ありて」「三日ばかりありて」と、日にちを追いつつ記されている。なお、参籠は、三日、七日、百日などの日限を定めて寺に籠り、祈願する。例えば『源氏』『玉鬘』での玉鬘一行の初瀬詣は「三日参籠」であった。

11・参りて、と思ふを、いと心憂かりしにこそ、もの憂く恥づかしう思えて、いとおろかなるものに思されぬべけれ、三条西本、寛元本は「参りて」の前に「宮より、いとおぼつかなくなりければ」とある。「心憂かりしにこそ」は「心憂かりしことにこそ」の略。先夜の「逢ひても逢はで」明かしたことをいう。「もの憂し」は、気が進まない。「はづかし」は、きまりが悪い、の意。「おろか」は、「疎か」。冷淡、疎遠の意。【新註】は「馬鹿者」、【川瀬】も「おろかな」と解すが、ここは、私（宮）のことを冷たいと思っていらいっしやるだろう、と慮った言い方。「こそ」の結び「べけれ」は、逆接の意となる中止法として解した。他本には「べけれど」とある。

12・日ごろは、「日ごろは」は、歌の「つらけれど忘れやはする」に自然につながっていく、歌文融合の型。

13・つらけれど忘れやはするほどふればいと恋しきに今日は負けなむ 二句切れ。「日ごろは……あなたへの思いを忘れることはない。逢えないままに日にちが経ってしまったので、今日は……」と、「日ごろは」と「今日は」を対にした表現。「負けなむ」は、菖蒲の根の長さや美しさを競う「根合せ」の縁で用いられた表現であるが、何に負けるのが明確ではない。忘れようと我慢して逢わないできたが、今日は根負けし、恋しい、逢いたいという気持ちが勝ったということか。「思ふには忍ぶることぞ負けにける色には出でじと思ひしものを」（古今集・五〇三・恋一・よみ人しらず）。上句は、三条西本、寛元本は「過ぐすをも忘れやすると程ふれば」。逢わずにいたら忘れられるかと思って訪れ

ずにいたが、という弁明として解されるが、不審。「忘る」の目的語は「過ぐす」であるため、「時を過ぐすことをも忘れるだろうか」と時間がたったので」となり歌意が不明瞭である。なお、初句に用いられる形容詞「つらし」は、女が薄情であることをいう。この後に続く贈答歌において、「つらき心」として女のほうの薄情を詠む際に用いられる。

14・浅からぬ心のほどを、さりとととあれば、菖蒲の根合せでは、浅い水辺から引き抜いた根は短いために負けになる。「五月五日、右大將殿より、菖蒲合せしたる扇に葉玉を置きて、これが勝ち負け定めさせ給へとありしに……／左にや袂に玉も結ぶらむ右は菖蒲の根こそ浅けれ」（赤染衛門集・一三五）。「さりとと」は、そうであっても。負けるとしても、ということ。下に「思し知らなむ」「推し量らせ給へ」などが省略されたもの。今日は勝負に負けるが、負けるといつても、浅くはなく深く思っている心の内をお察しください、と解した。下に「思し知りなむ」などを補い、「いくら何でもわかつて下さるでしょう」（川瀬）【新編】【笠間】などと訳することもできるが、ここは、宮が女に愛情の深さを訴えている場面と考え、採らない。

15・負くるとも見えぬものから玉葛とふ一筋も絶え間がちにて「負くる」に「来る」を掛ける。また、「くる」から「繰る」を連想し、「玉葛」が導かれる。「一筋」「絶え」も「玉葛」の縁語。「ものから」は、逆接。「負くるとも見えぬのに」の意になるが、下句は、文もめったによこさないというので、意味がつながらない。ここは、「ものから」で言い止した二句切れとして解しておく。本当においでになるのですか、という意が込められる。菖蒲の節会にちなんだやり取りにも関わらず「玉葛」が詠まれるのは「玉葛絶えぬものからあらたまの年の渡りはただ一夜のみ」（後撰集・二三四・秋上・よみ人しらず）など、「玉葛」が「絶え」を導く先行歌の表現を踏まえたか。なお、「（負）くる・来る・繰る」は三重の掛詞となり、珍しい例。「津の国のこやとも人を言ふべきにひまこそなけれ葦の八重葺き」（後拾遺集・六九一・恋二・和泉式部／和泉式部集・六九〇）の「こや」は、摂津の国の歌枕「昆陽」に「来や・小屋」を掛ける。

16・と聞こえたり。ここまで、五月五日の節句にちなんだ和歌をやり取りしながら、宮と女の心の距離は次第に近づいてくる。

17・宮、例の忍びておはしましたり。女、さしもやばと思ふうちに、前段、五月一日の時鳥の歌で、宮は「こ高き声を今日よりは聞け」と詠みながら、実際に訪れたのは三日後、しかも人目を忍んでの来訪であった。ここも宮が「今日は負けなむ」と詠むものの、女は、そうはいっても今日はいらっしゃらないだろうと、宮の訪れを待つてはいなかったのである。

18・日ごろの行ひに苦しうてうちまどろみたるほどに、「行ひ」は勤行のこと。「苦しうて」は、寛元本では「苦しくて」、三条西本は「困じ

て」。女は五月に入って間もなく精進潔斎をし、寺に三日ほど参籠した後に帰宅したため、疲れて寝てしまったのである。参籠中は、礼拝と誦経を繰り返す。『源氏』「明石」には、明石入道が娘の幸いを祈り、昼三回、夜三回、計六回の「六時の勤め」を行ったとある。

19・門叩くを聞きとがむる人もなし。聞こしめすこともあれば、人などのあるにやと思しめして、やをら帰らせたまひぬ。「聞きとがむ」は、通常は、不審なことに気づく意。ここは門を叩く音に気づく、ということ。取次ぎの者さえも気づかないのだから、まして邸内の女の耳には届かない。三条西本・寛元本は「聞きつくる」。「聞こしめすこと」とは、女のもとに男が通うという噂（後段（9）も参照）。宮は、女があえて開けなかったと考え、他の男の存在を疑う。宮の心理に踏み込んだ物語的な描写になっている。後段（12）にも、女の邸に同居していた別の女性に通う車を見とがめて疑う場面がある。「やをら」は、静かに、そつと。底本は「やをし」の「し」の上に朱で「ら」とあり、さらに朱で「ら」が傍書されている。「思しめしてや、をし帰らせ給ひぬ」と読めなくもないが、「やをら」と校訂した。

20・翌朝、本来は逢瀬の翌朝の後朝の文となる。宮は、女を疑いながらも、そのまま仲が絶えることは望んでいない。来訪した旨を伝え、女の気持ちを探るのである。

21・開けざりし真木の戸口に立ちながらつらき心のためしとぞ見し「真木の戸口」は、恋人が通う戸口（門）として歌に詠まれるのが常套。「夜もすがら水鶏よりけになくぞ真木の戸口に叩きわびつる」（紫式部集・七四）は、藤原道長が紫式部の局を訪れて戯れに詠みかけたと言われる歌。「つらき心」は相手の薄情な心。「ためし」は、証拠の意。通常は「長く続く例」の意を込めて賀歌に用いられることが多い。「松も池も心ありける宿なれば常盤にすまむためしとぞ見る」（左大臣家歌合長保五年・四二・為憲）。ここは女への非難の意を込めて、わざと大仰な表現を用いたか。

22・憂きはこれにやと思ふにもあはれになむとあり。底本「憂きはすれにや」は、（書）には「。わすれにや」とあり、「うき」は補入されている。また、三条西本・寛元本には「憂きはこれにや」とある。「憂き忘れ」と読むこともできるが（由良）、渡辺開紀「応永本『和泉式部物語』の引歌」（『滝川国文』38、二〇二二・3）、他に同様の例が見出せないため、「憂きはこれにや」と校訂し、「辛いとはこういうことか」と解した。『蜻蛉』で兼家が道綱母のもとを訪れながら、戸を開けてもらえなかった際の「げにやげに冬の夜ならぬ真木の戸も遅く開くるはわびしかりけり」（上・天曆九年十月）など、男の来訪を女が戸を開けずに拒絶する状況は、さまざまに歌に詠まれる。こういった先例を踏まえ、つらいとはこういうことか、としみじみ思ったのであろう。【考注】【朝日】【学術】は、「来て物言ひける人の、おほかたはむつ

まじかりけれど、近うはえあらずして／まぢかくてつらきを見るは憂けれども憂きはものは恋しきよりは」(後撰集・一〇四五・恋六・よみ人しらず)を引歌として解釈するが、「憂きはものかは」という表現は、この場面の宮の気持ちとは逆であり、引歌とは言い難い。諸注「引き歌があるか」とするが、特段引歌を想定する必要はなさそうである。

23・昨夜おはしましけるなめり、心なくも寝入りにけるかな、と思ひて、物詣の前日、女は「世とともに……」と、もの思いをする人は夜でも眠れない、と詠んだ。にもかかわらず、うかつにも寝てしまったことを「心なくも」と悔やむ。この部分「つらし」「心」という共通の語を用いながら、二人が次第に気持ちを寄り添わせていつていることがわかる。

24・いかにかは真木の板戸もさしながらつらき心のありなしは見む 「いかにかは」から「みせたくこそ」までは、女の書簡文。贈歌の「真木の戸口」を「真木の板戸」と詠み換え、「君や来む我や行かむのいさよひに真木の板戸も鎖さず寝にけり」(古今集・六九〇・恋四・よみ人しらず)の「真木の板戸も鎖さず」を踏まえて、「真木の板戸もさしながら」と状況を反転して詠み返す。古歌のように、恋人が来ることを期待して真木の板戸を閉めなかったのではなく、きちんと戸締りがしてあったのに、どうして浮気を疑うのか、と宮に反論するのである。「さしながら」は、戸を「鎖しながら」に、そのまま、の意「さ(然)しながら」を掛ける。「宿見れば蓬の門もさしながらあるべきものと思ひけむやぞ」(『蜻蛉』中・安和二年六月)。三条西本第二句は「真木の戸口を」。**【學術】**は、三条西本の「戸口」について、「戸口をさす」という言い方はあるし(「語らふべき戸口もさしてければ」『源氏物語』花宴)、戸口の方が、前歌の詞を取っている点で返歌の作法に合わない、かつ「口↓心」の技巧上もよい」と指摘する。しかし、「真木の板戸」は先に挙げた古今歌の他に、「山里の真木の板戸も鎖さざりき頼めし人を待ちし宵より」(後撰集・五八九・恋一・よみ人しらず)などのように、女性の立場で詠まれる歌に多くみられる。女を訪れる男は、邸の出入り口である「戸口」にたたずみ、戸が開くのを待つ。一方、男を待つ女は板戸の錠を開けておく。閉ざしたままの板戸は、男を拒絶する女の意味のあらわれということになる。よって、ここは応永本・寛元本の「板戸」の本文のほうが、場面にふさわしい表現であると考えらる。

25・推し量らせたまふべかめるこそ。見せたしは」とあり。「べかめる」は「べかるめる」の撥音便無表記。「見せたし」の「たし」は、話し手の願望を表す助動詞。「今朝はなどやがて寝暮し起きずして起きては寝たく暮るるまを待つ」(『栄花』あさみどり)。なお、底本は「見せたしはとあり」の「しはと」の上に「くこそ」と朱で上書きして、さらに傍書で「くこそ」とある。**【由良】**は「見せたしは」の「は」を

「係助詞から詠嘆の終助詞に転じた形」として「真心をお見せしとうございます」と解する。三条西本・寛元本は「見せたらば」であれば、「人知れぬ心の内を見せたらば今までつらき人はあらじな」（拾遺集・六七二・恋一・よみ人しらず／拾遺抄・二三四は二句目「心のほどを」を引歌とし、もし人に知られない心の内を見せることができたなら、今まで私に薄情な人はいなかったでしょうに」という歌意を踏まえた表現になる。あるいは「ら」を「し」と誤ったか。

26・今宵もおはしまさまほしけれど、かかる御歩きあひを人々も制し聞こゆるを、とかく宮などの聞こしめさむこともかなしきやうなりと、思しつつむほどに、いとはるかなり。「人々」とあるのは、宮に忠言する人たちのこと。「制し聞こゆ」は、「お止め申し上げる」。「宮などの」とある「宮」は、帥宮の同母兄である東宮、居貞親王のこと。冷泉天皇の皇子で、のちの三条天皇。東宮妃は、帥宮妃の姉、藤原済時の娘。三条西本は「制し聞こゆるうちに内大殿春宮などの」、寛元本は「制し聞こゆるうちのおほいどの春宮などの」。「内大殿」は当時の内大臣、藤原公季のこと。帥宮の生母、超子の叔父に当たるが、近い関係ではなく不審。ただし【學術】は、公季と近い関係であつた可能性も指摘している。三条西本については、「内・大殿・春宮」と区切り、「天皇・大殿（道長）・東宮」と解する注もある。【最新】は、寛元本「うちのおほいどの」を「うちにおほいどの」の誤写とみて、「制し聞こゆるうちに、大殿（道長）、春宮などの」と解する。「かなし」は、心が痛む、悲しいという意。三条西本「かろがろしう」、寛元本「かろがろしきやうなりなど」。

（渦巻 恵）

（8）雨うち降りていとつれづれなるころ

〔本文〕

雨うち降りていとつれづれなるころ、女は、いとど雲間なき長雨ながめに、世の中はいかになりぬるならむ、と尽きせずのみながめて、好きことする人々はあまたあめれど、ただいまもともかくも思はぬを、世の人はさまざま言ふべかれど、身のあはれこそ、とのみ思ひて過ぐす。

宮より、「雨のつれづれはいかが」とて、

しのぶらむものとも知らでおのがただ身を知る雨と思ひけるかな
と書きて、紙のひとへを引き返して、

ふれば世のいとうき身*の知らるるを今日のながめに水まさらなむ

待ち遠にや¹⁰と書きすさびたるを御覧じて、

なにせむに身をさへ果てむと思ふらむあめの下には君のみやふる¹¹

誰も憂き世を¹²とあり。

五月六日になりぬ。雨なほやまず。ひと日の御返りの、常よりも物思ひたりしに、あはれと思して、いたく降り明かして、翌朝^{つとめて}、「今宵の¹⁵

雨の音は、いとおどろおどろしかりつるを」など、まめやかにのたまはせたるを、

夜もすがらなにことをかは思ひつる窓うつ雨の音を聞きつつ¹⁸

かげに居ながら、あやしきまでなむ¹⁹と聞こえさせたれば、なほ言ふかひなくはあらずかし、と思して、御返り、

われもさぞ思ひやりつる雨の音をさせるつまなき宿はいかにと²¹

昼²²つ方、水まさりたりと聞きて人々見るに、宮も御覧じて、「今のほど、いかが。水、見になむ、出でてはべる。

大水のさしつきたるに比ぶれど深き心はなほぞまされる²⁴

さは知りたまへりや²⁵とある御返り、

今はよもきしもせじかし大水の深き心はかとはと見せつつ²⁶

かひなしや²⁷と聞こえさせたり。

〔臨川〕十一才十三才／一四八／一五〇頁〕

〔校訂〕*うき―(京)「けき」。「う」(字母「宇」)を「氣」と誤写したものと見て、三条西本により改める。

〔応永本校異〕(京)とある御返―(書)とある御返事

〔三条西本〕【清水】25／28頁　〔参考〕【本文篇】一六／一九頁・【本文集成】106／130頁

〔和歌他出〕23「しのぶらむ」歌―ナシ　24「ふれば世の」歌―ナシ　25「なにせむに」歌―ナシ　26「夜もすがら」歌―『和泉式部集I

〔正集〕二二八、『和泉式部集III(宸翰本)』七七、『和泉式部集IV(松井本)』一三三　27「われもさぞ」歌―『和泉式部集I

〔正集〕二二九　28「大水の」歌―ナシ　29「今はよも」歌―ナシ

〔現代語訳〕

雨がしきりに降ってひどく所在ないころ、女は、ますます切れ間なく垂れこめる雲のもたらす長雨に、世の中はもとより宮様との仲はどうなってしまうのだろう、とただただ際限もなく物思いにふけて、言い寄ってくる男たちは大勢いるようだけれど、今もまったく何とも思っていない、なのに世間の人々は明らかに私のことをあれやこれやと噂しているらしい、けれど現実に募るのは、この世に存在していないのにも等しいこの身のつらさと哀しさだけ、との思いばかりを抱いて過ごしている。

宮から、「この五月雨の所在ない日々はどうお過ごしですか」と書いて、

（女が）

雨でお出になれないのをじっとこらえながら恋い慕ってくださっているとは思っても寄らず、それこそ、あなた様にお越しいただけない我が身の不幸せを思い知らせる雨なのだと思っておりますよ。

と記したうえで、重ねてあった料紙の一枚を裏返して、

この世に生きつづけておりますと、つらく哀しい身の上であることがますます痛感されますので、こうして見やっておりますと、このまま降れば身も浮くばかりになろうかと思われる今日のこの長雨によって、川の水がその嵩を増してほしいと願わずにはいられません。増水が待ち望まれることですよ」と心のすさむままに書いてある手紙をご覧になって、

いったい何のおつもりで、その増水した川で身までを無きものにしてしまおうなどと思いいのですか。この雨があなたのところには降り降っているのではないように、この広い世の中でつらい思いをして生きているのはあなただけではないのですよ。誰もがみな、つらいこの世を、それでも生きているのです」としたためたお便りがある。

五月六日になった。雨は依然として降りやまない。宮は、女のある日のお返事が、いつもより思い悩んでいるふしがあったので、それを可哀想だと思いいになって、雨が降りやむのを夜通し待って、その早朝、「昨夜の雨の音は、ほんとうに恐いほど激しかったですね…」などと、心をこめておっしゃってきたので、

一晩中、ほかの何事でもない、あなた様のことだけを思いつづけておりました。窓を打つ激しい雨の音を聞きながら。

家の内にいて、あなた様のお蔭をこうむっておりますのに、不思議なほど袖が濡れそびました」とお返事申し上げたところ、宮は、やはり

取るに足らぬ女ではない、とお思いになって、お返事は、

私もそのように思いを馳せておりました。雨の音をさえぎる軒端のない、頼りになる夫もない家であなただはどうしておいでかと。

昼ごろ、賀茂川の水が増したといって人々が見物するので、宮もご覧になって、「今、どうしていらつしやいますか。私は、大水を見に、出てきております。」

押し寄せた洪水と比べてみましたが、深さは、あなたを思う私の心のほうがはるかに勝っていると思いましたよ。

それくらい私の気持ちが深いとはお分かりでしょうか」としたためてよこした便りへのお返事は、

あなた様は、今はもう万一にも、大水が岸に寄せたようになどお越しにはならないのでしょうか。私のことを思う気持ちは、ほらあれ、水嵩の増した川のように深いのだと仰せになりながら

お言葉だけでは甲斐のないことすわ」と申し上げた。

〔注釈〕

1・雨うち降りていとつれづれなるころ、雨が降りつづいてたいそう気の晴れぬころ。平安京において一定の関係にある男女にとって、雨に降りつづけられることとおよそ生じるであろう鬱陶しい状況を言う。当時、「うち降」る「雨」が大方に「つれづれ」の感覚をもたらしただであろうことは、『枕草子』は「つれづれなるもの」参照（二五三頁）。五月に入っていくらかの日数を経、本稿（7）の掉尾が「いとほるかなり」と結ばれていたことに鑑みて、それこそ六月ころを想うのも故無しとしない行文だが、ほどなく明らかになるとおり、時はなお五月の内にある。よって、ここに「うち降」っている「雨」は五月雨であり、それがために、事実上、宮の来訪は途絶している。

2・女は、いとど雲間なき長雨に、世の中はいかになりぬるならむ、と尽きせずのみながめて、前項で触れた一般的状況を陳べる文節を承けて「女は」との主語が改めて据えられることで、宮の来訪の途絶した位況下にある女の個としての、内面が前景化してくる恰好である。「いとど」は、応永本の固有。ますます、いっそう、の意。「雲間」は、雲の切れ間、あるいは雨雲の晴れ間をいう。「長雨」については、これまで諸注ほぼ一様に「ながめ」と表記して、「長雨」に物思いにふける意の「ながめ」を掛けるといった注を施してきたが、ここはむしろ、「長雨に、…ながめて」という表現をこそ意義あるものとして、その行文を味わうべきであろう。さて、「世の中」は、一義的には雨が絶え間なく降りつづく世間のことだが、本義は言うまでもなく、いっこうに訪れる気配を見せてはくれない宮との仲、を指す。「いかになりぬるなら

む」は、どうなってしまうのだろう、の意で、先行きに対する女の漠とした、しかし切実な不安を表す。「尽きせずのみ」の「尽きせ」は、果てる、尽きるの意のサ変動詞「尽きす」の未然形で、ここでは下の打消の助動詞「ず」と併せて、果てしなく、際限なく、の意。「のみ」は、これも応永本の固有。「尽きせず」を強調して、ただただ…、ただもう…、といったニュアンス。「ながめて」は、物思いにふけりながら見やうて、の意。女は、切れることも晴れることもない暗雲から落ちつづける雨を、晴れやらぬ不安な思いを抱いたまま見つづけている。

3・好きごとする人々はあまたあめれど、「好きごと」は、男が女に言い寄ること。自分に言い寄ってくる男たちはたくさんいるようだが、との女の認識を示す。この文節から「身のあはれこそ」までが女の一連の思惟であり、それらをそのあとの「とのみ思ひて過ぐす」が受ける構文である。なお、【中嶋】は三条西本が「あまたあめれど」とするのを引き合いにして、「応永本は『めり』を使っておぼめかしているが、断定的に述べた方が女の言わんとするところは良く受け取れようかと思う」と説くが、むしろ応永本文によれば、女には、自身が想像する以上、言い寄ろうとする男たちの存在は多いのかもしれないとする認識があった、とも読めよう。

4・ただいまもとかくも思はぬを、世の人はさまざま言ふべかれど、「ただいま」は、「いま」を強めて言う語。三条西本は「ただいまは」に作る。「は」であれば、以前はそれとして、今では、の意。それに対して応永本は、以前はもちろん今も、のニュアンス。今の今だつて何とも思わないのに、と、女はそれこそ現在の孤心に基づく自身の意識を押し出す。「世の人」は、世間の人々。女の耳に入る世評を形成する存在全般をいう。「さまざま言ふ」は、上の「とかくも思はぬ」と対置された表現。女の男関係に係る噂があれやこれやと取り沙汰されていたことを指す。「言ふべかれど」の「べかれ」は「べかるめれ」の撥音便無表記。三条西本の「言ふめれど」よりも、推量推定の確度の高い表現。自身の男関係にかかわる噂が一定程度以上に世間で喧伝されていることを、女が認識も意識もしていたことを示す。

5・身のあはれこそ、とのみ思ひて過ぐす。「身のあはれこそ」は、三条西本「身のあればこそ」、寛元本・扶桑拾葉集本「身のあらばこそ」と伝える。後者ならば、「人恋ふとはかなき死にをわれやせむ身のあらばこそ後逢ひ見め」（延喜十三年亭子院歌合・六三・恋）を引歌に想定し得ようこと、また、前者であれば、「いづ方に行き隠れなむ世の中に身のあればこそ人もつらけれ」（拾遺集・九三〇・恋五・よみ人しらず／古今六帖・二二二・第四・恨みず）の第四句を引き、いっそいなくなってしまうか、いなくなってしまうたい、くらいの意であること、いずれについても、これまで説かれてきたとおりであろう。ならば、「身のあはれこそ」ではどうか。いま、参考歌として「世の中にいづらわが身のありてなしあはれと言はむあなうと言はむ」（古今集・九四三・雑下・よみ人しらず）を掲げる。歌意を「どうしたことだ。

この世の中は、自分の身がこのように存在していて、いっぽうでは、実は存在していないに等しい。『ああ、しみじみ物悲しいよ』とでも言うのか、『ああ、嫌だなあ』とでも言うのか、そんな気持であるよ（片桐洋一『古今和歌集全評釈 下』）と捉えるならば、「身のあはれこそ」とは、「身のあはれこそ思はるれ」ないし「身のあはれこそ思ひ知らるれ」の省略として、宮様にお越しいただけぬ自分はこの世に存在していないにも等しい、そんなこの身の悲哀と憂さこそが思われる、くらの意になるであろうか。いずれにせよ女は、ただでさえ望みがたい宮の来訪が、雨によって絶望的に遠退くなか、孤独の淵に置かれゆく身のつらさを、強く悲しく噛みしめつづけるほかないのである。

6・宮より、「雨のつれづれはいかが」とて、「宮より」は、宮からの文が女の許に届けられたことを明示する。触れずもがなのこととはせず、女に思いを遣る宮という存在のあったことを言明する表現。「いかが」は、「いかががある」ないし「いかがあらむ」を略した形。いかがですか、と、宮は女の今を気に掛けるのである。これを承けての「とて」は、と書き始めて、のニュアンス。三条西本では、

宮より、「雨のつれづれはいかに」とて、

おほかたにさみだるとや思ふらむ君恋ひわたる今日のながめを

とあれば、折を過ぐしたまはぬををかしと思ふ。あはれなる折しも、と思ひて、

忍ぶらむものとも知らでおのがただ身を知る雨と思ひけるかな

と書きて、紙の一重をひき返して、

と伝えており、「とて」は、「おほかたに…」の歌のあとの「とあれば」が承けると読んで、何ら問題は無からう。ところが、応永本は、右の傍線部を持たないのである。これを、本文の書写段階での、「とて」の「て」から「思ひて」の「て」への、いわゆる目移りに因る誤脱と判じて、三条西本をもって補うことはできようし、それが最も素直で適確な措置であるとする考えもあるだろう。それに対し、あくまでも応永本文をそのままに尊重する立場から、「しのぶらむ…」の歌の詠者を宮と解したうえで、そのあとを「と書きて。」と処理する【由良】、あるいは『雨のつれづれは、いかが』とて。」として本文理解を試みる渡辺開紀「応永本『和泉式部物語』の特質」（『日記文学研究誌』11、二〇〇九・三）もある。本稿では、その驥尾に付しつつ敢えて別の文脈理解を示しておきたい。すなわち、

宮より、「雨の……」とて、(女が)「しのぶらむ……」と書きて、……、「ふれば世の……」と書きすさびたるを御覧じて、「なにせむに……」とあり。

というように行文の構造を捉え、宮は「雨の……」と文を認めはじめ、女の許から届いていた文(傍線部分)に書きつけられていた二首に改めて眼を落とし、そのうえで「なにせむに……」との一首を詠んで寄こした、要するに、「宮より」から「とあり。」までを一連なりの、なおかつ、「宮より……とて、……と御覧じて、……とあり。」と、事実上「宮」が主語として貫通する一文として理解しておきたい。応永本と向き合うことのジレンマが存するといえはそのとおりだが、ともあれ、結果的に、「雨のつれづれはいかが なにせむに身をさへ果てむと思ふらむあめの下には君のみやふる 誰も憂き世を」との便りが女のもとに届けられた、ということになる。ただし、その便りを認めるに際して宮が見つめた、女の「しのぶらむ」歌と「ふれば世の」歌はいつどの時点で宮の手許に届けられていたのか、それを窺い知る内部徴証は無い。

7・しのぶらむものとも知らでおのがただ身を知る雨と思ひけるかな【由良】は詠者を宮とするが、前項のとおり女の詠と読む。「しのぶ」は、「こらえる」の意と、もと清音で別語の「しのふ(偲ふ)」に由来する「慕う」の意とを掛ける。「あひ見ずてしのぶるころの涙をもなべての空の時雨とや見る」(『源氏』賢木)のように使われ詠まれた。その「しのぶ」を含んでの上の句は、底本の文脈においては、前段(7)から当該の状況に至るまでの動静をふまえての、女から宮への一種の当てこすりを含む嘆訴の脈絡を形成する。「おのがただ身を知る雨」の「ただ」は副詞で、まさしく、実に、の意。結句の「思ひけるかな」にかかる。その「ける」「かな」は、ともに詠嘆。「おのが」「身を知る雨」は、自分という存在が、相手との関係において何ほどのものでもないことを知らせる雨、また、そのような相手の心のほどを知って流す涙の雨、の義。なお、「身を知る雨」という表現は、すでに諸注が指摘するとおり、「かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」(古今・七〇五・恋四・在原業平／伊勢物語・一〇七段)のほか『和泉式部集(正集)』の二〇五・六四二などにも見える。なお、針本正行『「身を知る雨」表現史論』(室伏信助編『伊勢物語の表現史』笠間書院・二〇〇四)は「身を知る雨」が「出家・入水を指示するものでもあった」一面を詳述する。あとの「ふれば世の……水まさらなむ」の詠との響き合いに徴して首肯すべき見解かと思しいが、翻って、『和泉式部日記／物語』という作品の中で降りつづける、それゆえにこそ「女」におのが「身」のほどを「知」らしめた「雨」が、そのよう

に「女」の心に影響したことを跡づける表現の文脈に、改めて思いを致しておきたい。

8・と書きて、紙のひとへを引き返して、「しのぶらむ」の歌をしたためたうえで、重ねた料紙の一枚を裏返しにして、の意。述語に敬語が伴わないことに鑑みて、主語は女であると読む。「紙のひとへを引き返して」については、①「しのぶらむ」の一首を書いたその紙の一枚を裏返してと取る説と、②何枚かの紙のうちの一枚を裏返してと取る説とが行なわれてきたが、①の意味するところを古文に復すとして、「紙のひとへを引き返して」に還るものか、疑問。【中嶋】は「諸注さまざまで明解を得ない」とするが、一般に二枚重ねにされる手紙の、上包みにする礼紙らいしと呼ばれる「その一枚を裏返しにして追伸風に書きつけた」と説く【ほる】や橋本不美男『原典をめざして』（笠間書院・一九七四）の同様の見解（二五二頁）に従ってよいのではないか。いずれにせよ、女は一首では満たせぬ意を、更なる一首に託すのである。

9・ふれば世のいとうき身の知らるるを今日のながめに水まさらなむ 女が、「しのぶらむ」の一首を詠んだうえで、別の一枚の料紙を裏返して認めた歌。第二句「いとうき身の」、第三句「知らるるを」は、三条西本ではそれぞれ「いとど憂さのみ」、「知らるるに」。応永本の「うき身」の「うき」は、「憂き」に、下の「水」との縁で「浮き」が響く。また、言うまでもなく、「ふれば」には「経れば」と「降れば」が、「ながめ」には「眺め」と「長雨」が、それぞれ掛かる。なお、「水まさらなむ」の「なむ」は、…てほしい、…てくれればなあ、と、他者に対する希望の意をあらわす終助詞。果たして一首は、生きていると、この世が苦しく生きにくいものとはかりに思えてしまう、つらく悲しい身の上であることがますます実感されるので、こうして見やつてみると、このまま降れば身も浮くばかりになろうかと思われる今日のこの長雨によって川の水がその嵩を増してほしいと願わずにはいられない、くらいの意。女は、その水嵩の増した川によって流れ失せてしまいたい、との思いを込めたのである。前掲の針本論によれば、「身を知る雨」の表現と強く響き合い、結び合う一首、ということになる。

10・待ち遠にやと書きすさびたるを御覧じて、「待ち遠にや」は、（川の増水が）待ち望まれることよ、の意で、女の思惟であることが際立つ。「や」は、詠嘆の間投助詞。「待ち遠にや（あらむ）」ではなく、「待ち遠に（思はるる）や」と把握すべきである。これに対し、三条西本は「待ちとる岸や」。引歌表現であるように思いが、未詳。「書きすさびたる」も、三条西本「聞こえたる」との間に径庭が存する。「書きすさび（ぶ）」は、慰みに書く、気分のままに書く、の意。「ふざけて書いてある」（【新釈】）のではあるまい。『源氏』『蜻蛉』に「（浮舟ノ）文をも見るに、『亡き影に』と書きすさびたまへるものの、硯の下にありけるを見つけて…」とあるのが参考になるが、ここでの女は、沈鬱悲痛の思いに暮れるままに「ふれば世の」の詠を書きつけ、その思いをこそ届けるべく「紙のひとへ」をそもそも用いていたのである。

11・なにせむに身をさへ果てむと思ふらむあめの下には君のみやふる 宮の詠。「なにせむに」は、疑問の意を表して、どうして、なんのために、といった意味合いを形成する。「果てむ」は、三条西本・寛元本では「捨てむ」。「果つ」は、辞書的には自動詞と説かれるが、「しばし、このこと果てて、同じくは、かのこと沙汰しおきて（略）など思はむには、えさらぬことのみいとど重なりて」（『徒然』五九段）といった例のように、終える、尽くす、何もない状態にする、の意の他動詞と解し得る場合もある。ここもそれで、「果てむ」と「捨てむ」とは、事実上、同義である。「む」は、意志の助動詞。「あめ」は、「天・雨」を、「ふる」は「経る・降る」を、それぞれかける。「雨」と「降る」とは縁語。一首は、いったい何のつもりで、その増水した川で身までを無きものにしてしまおうなどと思いののか、この雨があなたのところにはばかり降っているのではないように、この広い世の中でつらい思いをして生きているのはあなただけではないのだよ、といった意。悲観的で沈鬱すぎる女の心情と詠歌とに宮は寄り添おうとしたのだが、女が「身を知る雨」と詠んだ切実さや緊迫感を、酌み取りきれてはいない。

12・誰も憂き世を」とあり。「誰も憂き世を」は、誰もがみな、つらいこの世を、それでも生きているのだ、の意。「誰もがみな」のなかに、宮が「この私だって」と含意していると読めば、「憂き世」の感覚の共有がここに成り立つ理窟だが、女の思いは言葉の上で回収されたに過ぎず、殊に「誰もがみな」と一般化されるとき、女には宮の無理解を痛感するばかりであっただろう。果たして、女の反応は、絶無である。なお、三条西本は「誰も憂き世をや」と「や」を持つ。それを持たない応永本の表現は、いかにも七音であることから、とかく引歌が喋々され、「なかなか辛きにつけて忘れなば誰も憂き世を嘆かざらまし」（大式高遠集・一二四）をそれかとする施注も近時の【新釈】に至るまで行なわれてはきたが、一首の歌意はここに契合するものではあるまい。なお不詳とするほかない。

13・五月六日になりぬ。雨なほやます。「五月六日」は、三条西本では「五月五日」。「五日」であれ「六日」であれ、作品世界内の日々の経過・量積がありながら、ここにその日付が現れる不審、すなわち五月記事が実際の日数を大幅に超過し、六月記事が欠落しているかと疑われる事象をめぐっては、夙に吉田『研究』が日次の乱れと暦日との照応を中心に論じ、森田『論攷』や金井利浩『和泉式部日記』一面（日記文学懇話会編『日記文学研究 第一集』新典社・一九九三）、小谷野純一『和泉式部日記』の表象」（『中古文学』75、二〇〇五・5）などが続き、【全講】【中嶋】【角川】では簡にして要を得た整理が行なわれてきたが、こんにち私たちは、「乱れ」の因由についてもその意味づけについて、定解はもちろん、明解をさえ得てはいない。吉田前掲書の主唱した誤写説、すなわち「五日」を「十九日」の、「六日」は「十八

日」の、それぞれ誤写であるとする把握は、かの『本朝世紀』の伝える天象とも合っていて一定の理を認めるに吝かではないが、「五月十八日」にせよ「五月十九日」にせよ、その日付がそのように刻みつけられるだけの意義を、それこそ後条の「十二月十八日」が持ち合わせているであろうそれを帯びているのかどうか、訝しさを拭いきれない。尤も、その点では、応永本の「五月六日」も同断である（金井利浩「日記文芸的な、ひそやかに日記文芸的な」（『日記文学研究誌』24、二〇〇二・3）参照）。翻って、日かずを敢えて確認したりしなければ、「五日」に対してであれ「六日」に対してであれ、特段の違和を抱くことなく行文を追えるのも事実なのであって、生成論ないし成立論的な観点からこの日付を穿鑿することは、或る意味で不毛であろう。むしろ、ここで読みとして肝要なのは、五月雨がなおも降りやまぬゆえに宮の来訪の実現は遠いと判断せざるを得ないということであり、女の心象風景そのものでもある雨やまぬ景に変化をもたらすような状況はさしあたり到来しないという現実が前景化しているのだという一点を確認しておくことであろう。

14・ひと日の御返りの、常よりも物思ひたりしに、あはれと思して、「ひと日」は、先日、ある日。「常よりも」以下、三条西本との間に小異があるが、趣意に径庭はないと見做してよからう。「ひと日の御返し」については、先の項（6）で述べたとおり、応永本では「しのぶらむ…」や「ふれば世の…」を返歌とは見做すことができないゆえに、作品に顕在化していない「ある日のお返事」と解するほかないであろう。宮が、それが「常よりも物思ひたりし」ものであったことから「あはれ」と捉えかえし、ここに一步を踏み出したのだと読み得ることに変わりはあるまい。すなわち、応永本は、言うなれば行間に一つの〈区切り〉を設けたそのうえで、宮を、女の返書の歌に、女がいつもより思い沈んでいるようすを感じ、憐憫の情をもよおさずにはいられなかった存在として描き始めるのである。

15・いたく降り明かして、翌朝、「降り明かす」は、朝になるまで降り続ける、がその語義。ただし、「明かして、つとめて」には、宮を主体とした文脈、すなわち、降り止むのを夜通し待つて、果たして止んだその早朝、といったニュアンスを斟み取ってもよい。

16・「今宵の雨の音は、いとどろどろしかりつるを」など、「今宵」は、夜が明けたあとに、その明けた夜をふりかえってという。昨夜。昨晚。「おどろおどろしかり」は、「おどろおどろし」の連用形。ものの程度が尋常ではなく、または不気味で、おどろくべきさまであることを表す語。「つる」は完了の助動詞。「を」は詠嘆の終助詞。「昨夜の雨の音は、ほんとうに恐いくらい烈しかったですね」などと、の意。

17・まめやかにのたまはせたるを、「まめやかに」は、形容動詞「まめやかなり」の連用形。誠意・実意がこもるという意味の「まめ」に接尾語の「やか」が付いて成った語で、誠実なさま、本気であるようす、本心からであるさまなどをあらわす。宮は、女の身を案じて、心のこ

もった、誠意ある言葉をしたためた便りを女のもとに届けたのである。なお、その「まめやかに」を、三条西本・寛元本は持たない。異同としての大きさにとどまらず、宮という人物の評価、宮と女との関係性や距離感の測定への影響、無しとしない。

18・夜もすがらなにごとをかは思ひつる窓うつ雨の音を聞きつつ 「夜もすがら」は、一晚中、の意。「かは」は、反語。「窓うつ雨」は、指摘されてきたとおり、「耿耿残灯背壁影 蕭蕭暗雨打窗声」（白氏文集・卷三・上陽白髮人／和漢朗詠集・秋夜）を踏まえる。これは、頼みとする皇帝の寵愛を得られぬまま上陽宮に幽閉され年老いてゆく薄幸の女性の嘆きを描いた一節だが、『源氏』「幻」に「……「窓をうつ声」など、めづらしからぬ古言をうち誦したまへるも」とあることから、当時、女房たちの耳目にはかなり浸透していたと見え、雨の夜に男が訪うてはくれぬ寂しさを詠む和歌の表現としても、その定着度は低からぬものがあつたと思われる。

19・かげに居ながら、あやしきまでなむ」と聞こえさせれば、「かげに居ながら、あやしきまでなむ」は、家の中におり、あなた様の庇護の下にもおりますのに、不思議なほどに袖が濡れました、といった意。「かげ」は、物陰の意と、庇護の意とを掛ける。【集成】は、この「かげ」も右に引いた白詩に拠るとするが、「かげ」のみに留めるべきではなく、やはり通説どおり、「降る雨に出でてぬれぬ我が袖のかげにゐながらひちまさるかな」（拾遺集・九五八・恋五・貫之）の第四句を引いたと見ておくべきだろう。女は、宮から優しく差しのべられた手に応えるべく、白詩につづいて貫之の詠をも引きながら返事をものしたのである。

20・なほ言ふかひなくはあらずかし、と思ひて、御返り、「言ふかひなくはあらずかし」は、取り柄のない女ではない、といった、宮の感触をあらわす。女が白氏の詩句や貫之の歌句を自在に駆使した返書を以て応じてきたことで、宮は、見どころはあるなど改めて感じ入って、返歌におよぶのである。なお、【平田】の、「宮から女へのほめ言葉」は「二重否定が用いられることが多い」との指摘を多としたい。

21・われもさぞ思ひやりつる雨の音をさせるつまなき宿はいかにと 女からの詠に対し、やはり倒置の構造を以て応じた宮の詠で、「われも：思ひやりつる」は、女の「：思ひつる」に相応じたこと歴然の体。「さぞ」は、副詞「さ」＋係助詞「ぞ」。その「ぞ」を承けた、完了の助動詞「つ」の連体形「つる」を以て倒置文脈の上部が結ばれる。「させる」は、さほどの、といった意の連体詞「然せる」と「鎖せる」（＝「鎖す」の已然形＋完了の助動詞「り」の連体形）とを掛け、「つま」には、「夫」と「軒端」とを掛ける。この「させるつまなき」が、説かれ来ったように「寒闇に独り臥して夫婦なし」（和漢朗詠集・恋）を下に敷いているのだとすれば、女の用いた手法への理會を示しつつ、それと同様に漢詩を踏まえて応じた一点こそ、この一首の生命線というべきであろう。

22・昼つ方、水まさりたりと聞きて人々見るに、「昼つ方」は、連体修飾語をつくる格助詞「つ」によって、昼ごろ、の意。「まさり（る）」は、川の水嵩が増す、川が増水する、の意。三条西本・寛元本は「川の水まさりたり」とする。賀茂川の洪水は、『日本紀略』『本朝世紀』『権記』等の長保五年五月十九日条に記録が残る。人々の耳目を引いたことは容易に想像されよう。

23・宮も御覽じて、「今のほど、いかが。水、見になむ、出でてはべる。」今のほど、いかが」は、今のこの時を、どのようにお過ごしのか、の意。三条西本は、「ただ今いかが」に作る。いずれにせよ、先の「雨のつれづれはいかが」と同様に、女へのいわゆる挨拶の言辭。「出でてはべる」は、三条西本「行きはべる」。ともに丁寧語「はべり」を用いながら「出づ」と「行く」とで動詞は異なるが、川が増水を見物すべく外出に及んだという意味では差異はない。なお、森田『第二』は、宮のそのような単なる物見高さを超えた、一種異様な行動の背景に「無為徒然な生活」の厳存を指摘し、「どうしようもないほどのつれづれの深淵に落ち込んでいる青年の心」を読み取る。

24・大水のさしつきたるに比ぶれど深き心はなほぞまされる 宮の詠。三条西本・寛元本は、第二句を「さしつきたるに」、結句を「われぞまされる」に作る。あとの女の返歌が「さしもせじかし」と応じていることに鑑みて、「さし」を「きし」の誤写とすることが順当のようにも思われるのだが、一方で、三条西本文も絶対的ではない。たとえば、諸書に説かれてきた、「つき」は「漬き」であるから「さしつきたる」は「川岸をひたす」の意である、との解は、不審。「…をひたす」なら「つく」は他動詞でなければならず、従って、下二段活用の連用形「つけ」を以て「さしつきたる」があるべき形ではなかったか。また、「さしつく」を立項する『日本国語大辞典』は、「岸に着く。岸に達する」の義と説くが、そもそも「岸」と「つく」との接合はあり得るのか、語の存立そのものへの検証は、なお必要であろう。片や応永本の「さしつく」をめぐるのは、【由良】が「大水がさして、つかっている深さに」との解を示すが、いささか無理であろう。そもそも「深さ」は、「大水」が内包している属性であって、補読すべきものではあるまい。そこで、いま、一つの具体例に拠りたい。すなわち、「かの岸にさし着きて、〔浮舟ガ〕下りたまふに…」（『源氏』浮舟）との用例から「〔舟ガ〕到着する、到達する」との語義を知り得るが、ここから、「〔波ガ〕到達する」といった意に解する余地はあるものと考えたい。加えて、「さし」を、下接する動詞の意味を強めたり、語調を整えたりする接頭語、「大水の」の「の」を、いわゆる同格の助詞と見れば、果たして応永本の「大水のさしつきたる」は、「大水で、岸にどっと到達した（大水）」と解し得よう。もしくは別途の可能性として、かの「池めいて窪まり、水つけるところあり」（『土左』）の「つく」が「漬く」であり、「溜まっている」の意に解されることを援用し、「大水のさし漬きたる」との本文を立て、「大水で、岸にあふれかえった（大水）」との解

も成り立ち得ようか。いまは、このあとの女の返歌のありように鑑みて、前者を押し立てておく。

25・さは知りたまへりや」とある御返り、「さ」は、直前の歌に示された宮の気持ちを指す。「さは知りたまへりや」と、歌を直ちに承ける体で、私の思いがそのような深いものであるとは分かっておいででしたか、と宮は女に迫るのである。「…とある」は、三条西本では「…あり」とあってそこで句点を施し得るが、応永本では、次の「御返り」にかかると見るのが順当であろう。

26・今はよもきしもせじかし大水の深き心はかはと見せつつ 第二句の「きしも」は、「来しも」と「岸も」を、また結句の「かは」は、「川」と「彼は」を、それぞれ掛ける。ちなみに、「来しも」の「し」は強意の副助詞、「も」は係助詞、また、「彼は」の「は」は詠嘆の終助詞。ところで、この女の一首は、またも倒置の構造をとる。それによって、次の「かひなしや」へと滑らかに接続する恰好である。

27・かひなしや」と聞こえさせたり。「かひなしや」は、むだである、ふがいない、などの意をあらわす形容詞「かひなし」の終止形に詠嘆の間投助詞「や」が接続した表現である。直前の歌の下句から地続きの文脈を形成し、「あの川のように深い心があるとおっしゃっても、お言葉だけでは何の甲斐もありませんわ」といった意を生成していると捉え得る、遠藤嘉基のいわゆる歌文融合の一事例でもある。なお、三条西本は「かひなくや」、寛元本は「かひなくな」と伝える。いずれにせよ、女は歌のみにとどめることなく、宮の用いた、歌に直ちに言葉を添えるという体裁に真つ向から相応ずるそれを以て、自らの文を投げ返したのである。

(金井利浩)

(9) おはしまさむと思して

〔本文〕

おはしまさむと思して御火取など召すほどに、侍従の乳母、参う上りて「出でさせおはしますはいづちに。このこと、いみじう人々申するは。なにのやむごとなき人にもあらず。召し使はせおはしまさむと思しめさむかぎりは、召してこそ使はせおはしまさめ。かるがるしき御歩きはいと見苦しきことぞ。ただにも人々あまた通ふところなり。便なきことも出でまうで来なむ。すべてすべて、よからぬことは、この右近の将監なにがしがはじむるなり。故宮も、これこそは率て歩きたてまつりしか。夜、夜中と歩かせたまひて、よきことやはある。かかる御歩きの御ともに歩かむ人々は、大殿に申さむ。世の中は、今日明日とも知らず、変はりぬべかめり。殿の思し掟てしことどもあるものを、世の有様、ご覧じはつるまでは、かかる御歩きなくてこそおはしまさめ」と申したまふ。いつちか行かむ、つれづれなればはかなきすさびごと

をことごとく言ふべきにもあらず、かねてのたまはせむには、あやしくすぎなきものにこそあれ、さるはいと口惜しからぬものにこそあめれ、呼びてや置き²⁴たらまし、と思せど、まして聞きにくきことぞあらむ、など思し乱るるほどに、おぼつかなくなりぬ。

〔臨川〕十二ウゝ十四オ／一五〇／一五二頁

〔校訂〕 *召すほとに―(京)「め^(墨・す)にほと」とある傍記(墨書)に拠る。

*ただにも―(京)「たふも」を(書)「たゝにも」に拠り改める。

*率て歩きたてまつりしか―(京)「ぬく^(墨・て)ありきたてまつりしか」とある傍記(墨書)に拠る。吉田『本文篇』は「いゝありきたてまつりしか」と判読している。

*すさびごと―(京)「すまひ事」の「ま(万)」は「さ(左)」の誤りか。三条西本ほか「すさみこと」。

*かねてのたまはせむ―(京)「かねのたまはせむ」を(書)「かねてのたまはせん」に拠り改める。三条西本ほか「とはかりのたまはせん」。

*置きたらまし―(京)「をきたゝまし」の「ゝ」は「ら」の誤りか。(書)ほか「おきたらまし」。吉田『本文篇』は「をきたらまし」と判読している。

〔応永本校異〕(京)め^すにほと―(書)めすほとに―(京)いづ^(宋・ま)ちに―(書)いつちそ―(京)このこと―(書)この御事―(京)たふも―(書)たゝにも―(京)ぬく^(墨・て)ありきたてまつりしか―(書)ゐてありきたてまつりしか―(京)すまひ事―(書)すさみこと―(京)かねのたまはせむ―(書)かねてのたまはせん―(京)をきたゝまし―(書)おきたらまし

〔三条西本〕【清水】28ゝ30頁【参考】【本文篇】一九ゝ二二頁・【本文集成】130ゝ143頁

〔現代語訳〕

(宮は女の所へ) お出でになろうとお考えになって、香炉などを取り寄せていらつしやるときに、侍従の乳母が参上して「お出かけあそばすのは、どちらに。このことを人々がとやかく噂申しているとのことだ。たいした身分のある女ではありませんまい。お使いになりたいとお思ひならば、こちらの邸に召し出してお使いなされ。軽々しいご外出はじつに見苦しい。ただでさえ男たちがたくさん通っている所なのだ。不

都合な事態もきつと出てまいりましょう。何から何まで碌でもないことは、あの、右近の将監、某がしでかすのだ。亡き宮をも、あやつが（女のもとへ）お連れ申しあげて歩いたのだ。夜、夜中と（見境なく）お出歩きになって、よいはずがない。こんなご外出にお供する者どもは、大殿にご報告申し上げます。世の中は、今日明日とも知らず、変わってしまうかもしれません。亡き殿がお取決めたことでもあるゆえ、世の動向がおさまるのをお見届けなさるまでは、こんな夜歩きをなさらないほうがよろしゅうございます」とお諫め申しあげなさる。（宮は）「どこに行ったりしようか。心晴れぬためのちよつとした戯れを大袈裟に言うべきでない。前々より殿のおっしゃる通りとなれば、その時には（通うのをやめるよ）。身分も低くつれない者ではあるが、そうではあっても、まんざら捨てた者でもない、この邸に呼び寄せて側に置いみようか」とお考えになるが、「（そうしたところで）今以上にますます悪い噂が立つだろう」と思い定めかねていらつしやるうちに、間遠になってしまった。

〔注釈〕

1・おはしまさむと思して御火取など召すほどに、「おはしまさむ」「思す」ともに尊敬語で、主体は宮。「おはしまさむ」は、「御火取など召す」の動機付けの役目を果たす一節。「御火取」は、火取香炉のこと。香を焚く道具で衣服に香りを染み込ませるために用いる。また、衣服に焚き染めるは香を薫衣香（くぬえかう・くのえかう）などという。「めす」の箇所、底本の「めにほとに」では意が通らないので、書陵部本「めすほとに」に拠り改める。「御火取召して、山の土所々試みさせた」（『うつほ 国譲中』）ほか、『源氏』『真木柱』（三六四頁）、「梅が枝」（四〇七頁）などに用例がある。また、「御火取」の箇所、三条西本「たき物など」とあり、この異同について、伊藤『伝本攷』が「応永本が「御火とりなどめす」とあるのは、道具としての意味がまず前面に出てくる。（略）一方、三条西本が「たき物などせさせ給」とあることから、宮の優雅さ、女性を訪問するに際しての心くばり（宇津保物語・源氏物語などの男主人公に通う）が伝わってくる。「御火取」からも芳香は漂ってくるが、「薫物」のほうが、より情趣的であり、恋の場面にふさわしい用語であるといつてよからう」と指摘している。

2・侍従の乳母、参う上りて 「侍従の乳母」は複数いる宮付きの乳母の一人か。「凡そ親王及び子には、皆乳母を給へ。親王に三人、子に二人。」（後宮職員令）『律令』日本思想史大系・二〇二頁）。ただし、増田繁夫『冥途』は「帥宮などの有力な親王には普通乳母は四人おかれる。この侍従の乳母のことは他に見えないが、あるいは帥宮の父の「冷泉院の御乳母の侍従」（元輔集）かも知れない」とする。「参う上る」は「参ぬ上る」の音便形で「同じ邸内から貴人・主人の前にうかがう」の意（森昇『平安時代敬語の研究』おうふう・一九九二）。

3・「出でさせおはしますはいづちに。」後文「かかる御歩きなくてこそおはしますめ」までが乳母の発話。「出でさせおはします」は、三条西本「出でさせたまふ」よりもさらに高い敬意を表す「―させおはします」が用いられ、また応永本じたい「―させおはします」が頻繁に使われる。後代の敬語の混入かもしれないが（伊藤『伝本攷』）、これ以上ない丁寧な口調が乳母の「にがにがしげな表情」（由良）を彷彿とさせる。「いづちに」は、底本の独自異文。どこに、の意。宮の外出先の情報を得たいわけではなく、この時間帯にどこへ行かれるのか、外出を控えるように、と自制を促す発話。諸注釈が女のもとへ宮が向かうとしているのを乳母は見越していると推察する通りであろう。また、「いづちに、出でさせおはします」の倒置と見ることで、そこに強い語気で宮を咎める乳母の口吻が窺える。なお、他本は「いづちぞ」とあり、その本文に拠る場合は、文末「ぞ」に詰問の思いが滲む。

4・このこと、いみじう人々申すなるは。「このこと」は、直前の「出でさせおはします」を受け、宮が身分卑しい女のもとへ夜歩きをしていることを指す。「いみじう」は「申すなるは」に係り、ここでは好ましくないさまについて程度がはなはだしいことをいう。「申すなる」の「申す」は「言ふ」の改まった言い方で、いわゆる対話敬語。乳母が聞き手である宮に対して丁寧な物言いをしている。「なる」は伝聞、文末の「は」は詠嘆。「申すなる」は、悪い噂が立つ、という意を表す。「軽々しき御ありさまと、世人も下に譏り申すなり」（『源氏』総角・三〇一頁）、「世の人の申すなるやうに」（『大鏡』）など「世人・世の人」とともに用いられやすい。乳母の言うこの「人々」の範囲を【全講】は「侍従の乳母の口吻からいえば、どうも宮邸内のごくかざられた人々の噂をさしているらしい」とする。あるいは広く世間の人々と解し、夜歩きが世間に漏れ出しているかのように大げさに述べることで宮に世間へ目を向けさせ、自制を促す意図をもった話法とも言えるか。

5・なにのやむごとなき人にもあらず。「なにの」の下に打消の語を伴って、なにほどの、の意。「やむごとなし」は、ここでは「地位・家柄などが第一流である。高貴である」（『日本国語大辞典』）こと。三条西本「やむごとなき際」。

6・召し使はせおはしますと思しめさむかぎりは、召してこそ使はせおはしますめ。阿部秋生『源氏物語研究序説』（東京大学出版会・一九五九）以来、女を「召人」として扱うように意見したとするのが通説。「召人」の議論はさまざまだが、上記、阿部論は「召人」を「仕えている主人や主人格の男性と肉体関係をもつ女房」と定義する。身分が釣り合わず妻として遇するのが難しい女性を邸内で召し抱えることが貴族社会で黙認されていたらしい。この乳母の提案に対し、今後、宮が女との関係にどのような道筋をつけていくのが作品全般の見所になる。「こそめ」は勧誘表現の一つで、聞き手への強めの働きかけを表す。ここにも最高敬語「―せおはします」が二度使用されている。

7・かるがるしき御歩きはいと見苦しきことぞ。宮ともあろうお方が身分を顧みず卑しい女に通うのは甚だ見苦しい類に属することだ、ということ。文末の「ぞ」は誰かを詰問する際に多く用いられる語。かつて宮自身も心内で「かるがるしき歩きなどすべきにもあらず」（注釈稿（1）の（5））と思っていた。「かるがるし」は「かるがるし」の母音交替形で、三条西本は「かるがるしき御ありき」とある。

8・ただにも 底本「たふも」に「堪・当・問・尊・疾」などの漢字を宛てても意が通じない。書陵部本「た、にも」に抛り改め、ただでさえも、の意と試解した。三条西本「そが中にも」とあり、こちらのほうが意は通る。

9・人々あまた通ふところなり。「人々あまた」は「かくまいりくるをひなしとおもふ人／＼あまたあるやうにきけは」（臨川）一五二頁）などのように「人々が大勢」を意味する慣用的表現。「人々あまた」全体が「通ふところ」を修飾する。この「人々」は、いわゆる「影の男たち」（全講）のこと。「ところ」は、文脈上、女のもとを指しているが、「女の邸」（武田早苗『平安中期和歌文学攷』武蔵野書院・二〇一九↓武田『文学攷』）に絞り込む読み方もある。文末の「なり」は断定。「和泉式部を頭からふしだらな女と決めつけている乳母の心理が反映している」（學術）という。

10・便なきことも出でまうで来^きなむ。「出でまうで来」は、「出で来」の謙讓語で、聞き手に対し「出で来」を改まって丁重にいう対話敬語」（『日本国語大辞典』）であり、出て参ります、の意。文末「なむ」は、強意「ぬ」に推量「む」が付いた形。全体として、宮の身の上に不都合な事態がきつと出来^{しゅったい}するだろう、という懸念を述べていることになる。「便なきこと」とは、「宮の身に危害が加わるとか、宮の名誉になるとかいふやうな不都合な問題」（新註）で、「式部のもとに通う他の男性と宮とががちあう」（全講）のようなトラブルを恐れていることをいう。乳母がこのように言うのは「長徳の変」と発端となった花山院奉射事件が関係していると諸注釈の多くが推察する。

11・すべてすべて、よからぬことは、この右近の将監^{せうざん}なにがしがはじむるなり。「すべてすべて」は、「すべて」を重ねて強調した表現で、何から何まで、の意。「よからぬこと」には、「いみじう人々申すなる」醜聞が流布しはじめているのに、それでもなお「軽々しき御歩き」を止めない宮の行状^{ぎょうじょう}、さらには、過去に右近の将監が故宮を連れ歩いて女のもとに通っていたことなどが含まれよう。「この」は、三条西本のみが持たない語句。「そこに控えておる」（新訳）とも解せるが、『角川古語大辞典』の「この」の説明に従い、右近の将監は宮と同席していないと見ておく。「右近の将監」は【注釈稿（1）】の（4）参照。「なにがし」は、右近の将監の実名を伏せた書き方。「乳母はここで男の名前を口にしていられるが、実名をはばかり、日記では伏せられている」（【ほる】）のであろう。「こ」は乳母の語気からみて、さげ

すみの心からわざと名をいかなかったであろう」(『全講』)とする指摘もある。文末「なり」は、連体形「はじむる」に付く、断定の助動詞。

12・故宮も、これこそは率[★]て歩きたてまつりしか。「故宮も」は、亡き宮をも、の意。「これ」は直前の「右近の将監なにがし」のことを指す。底本「ぬくありき」を書陵部本はじめその他の諸本の「率て歩き」によって改めた。

13・夜^{よる}、夜中^{よなか}と歩かせたまひて、よきことやはある。底本「よる夜中と」と漢字表記を用い翻刻されてきた箇所。他本に「よる夜なかと」とあることから、「よるよなかと」と訓むことにする。「夜、夜中」は平安朝の語彙としての用例は少ない。『栄花』の6例ほか『十訓抄』『とりかへばや』『浜松』『寝覚』などに散見される程度。「昼日中」に対して夜中を強調して言ったもの(『詳解』)とされるが、『栄花』においては「世の中の騒がしきころ、夜夜中分^{ぶん}かぬ御歩きもいとしろめたげなり。」(みはてぬゆめ・一九三頁)など、全ての用例が「夜夜中分^{ぶん}かず」という形で用いられる。これらから真夜中の一時点を示す時間表現とは解しにくく、「夜」と「夜中」と区別される時間帯の表現を重ね、持続的な時間の流れを強調する語句ではなからうか。試みに当該の「夜、夜中」を訳出するにあたり、「夜、夜中と(見境なく)」と括弧の部分を補った。「歩かせたまふ」の「―せたまふ」は最高敬語。前出「率て歩きたてまつり―歩かせたまひて」と言葉を重ねて「夜歩き」を諫めている点に注意。「よきことやはある」の「―やは」は反語。

14・かかる御歩きの御ともに歩かむ人々は、「かかる」は「かくある」の約で、直前の「夜、夜中と歩かせたまひて」を受ける。「人々」には、「右近の将監なにがし」ほか、小舎人童や車副^{くるまのへい}として働く下層の存在が含まれよう。

15・大殿に申さむ。大殿にご報告申し上げよう、の意。底本では「大殿」と漢字表記。「おとど(＝大臣)」と訓めなくもないが、三条西本や寛元本に「大との」とあることから、「おほいどの(おほいとの)」または「おほとの」と訓むのが穩当。「大殿」は、大きな御殿の意から転じて、そこに住む人や邸宅の主人を指す。人物比定としては、藤原道長を指すとするのが有力。本作品が描く長保五年の時点では、藤原道長は左大臣・内覧であり、さらに宮の住まうとされる東三条院を統括する立場にあった。また、萩谷朴「右近の尉の存在」(『おもいつきり侃々』河出書房新社・一九九〇)は、この一節から「右近の将監」に道長の家司^{けいし}(家政機関の職員^{しきいん})であった藤原親業^{ちかなり}を宛てている。

16・世の中は、今日明日とも知らず、変はりぬべかめり。「世の中」には「治世」の意があるので、「世の中・変わる」で御代替わりや讓位を仄めかしているように読める文脈。それに伴い宮の立太子の可能性も始めてくると乳母は言いたい。史実の上で敦道立坊の可否は意見が分かれる(森田『第二』、鈴木日出男『古代和歌史論』(東京大学出版会・一九九〇)、山中裕『藤原道長』(吉川弘文館・二〇〇八)など)。

17・殿の思し掟^{おき}てしこともあるものを、「殿」は邸の主人や大臣クラスの人物を指す敬称。その人物については、前出「大殿」の略称なら藤原道長、「大殿」と別語なら藤原兼家だとされる。「思し掟てし」とあり、「思し掟つ」の連用形に過去の助動詞「き」の連体形が下接しているため、「大殿」と「殿」は別人物と捉え、「殿」は兼家に比定しておく。「思し掟てしことも」の詳細は不明だが、文脈上は宮の立坊と解釈できる。史実の上で、敦道が兼家鍾愛の孫であったことは、森田『第二』に詳しい。

18・世の有様、ご覧はつるまでは、かかる御歩きなくてこそおはしまさめ」「世の有様」は、直前の「世の中は…変はりぬべかめり」に対応し、世間または政治情勢の意。「ご覧はつる」は「見果つ」の尊敬語で、成り行きを見届ける、の意。「かかる御歩き」は、前出「かるがるしき御歩き」や「夜、夜中と歩かせたまひて」に同じ。「なくてこそおはしまさめ」の「こそ…め」は適当・勧誘で、なさらないほうがよいでしょう、お慎みくださいませ、という意味になる。

19・と申したまふ。「申し」は「言ふ」の謙讓語。主体は乳母、客体は宮。補助動詞「たまふ」は地の文で乳母に尊敬語を用いていることになる。三条西本では「と聞こえたまへば」とあり、いずれの伝本に拠っても侍従の乳母に敬語が付く。ちなみに、【昭完】は、乳母クラスの人物に対する敬語への不審から、応永本の「申給」は「申す」、三条西本の「聞こえたまへば」は「聞こえたれば」の誤写とする。

20・いづちか行かむ、三条西本では、この部分から後文の「ことこしう言ふべきにもあらず」までが、「とばかりのたまはせて」で受ける宮の発話となり、文脈としては難がない。しかし、「とばかりのたまはせて」の箇所を、底本は「かねのたまはせむ（書・かねてのたまはせん）」と作るため、会話文の始まりとして捉えるのは難しい。そこで心内文の始まりと捉え、この辺りの文脈の注釈を試みた。したがって「いづちか行かむ」は、乳母に「出でさせおはしますは、いづちに」と難詰されたことに対して、どこへも行くもんか、という宮の心中を描写したものと解しておく。「いづちか」の「か」は反語。

21・つれづれなればかなき^{*}さびごとをことこしう言ふべきにもあらず、宮もまた女との交際を、作品に頻出する「つれづれ」「はかなき」の語で規定している（注釈稿（1）の（2）参照）。底本「すまひ事」は他に用例がなく、文意不通。京大本は「ま（万）」と「さ（佐）」の字形の紛れが多いので、「すさひ事」と採れば、三条西本と同文として、戯れごとの意で解せる。なお、書陵部本「すさみごと」とある。「ことこしう」は形容詞「ことこし」のウ音便、大げさに、の意。「コトコトシイCo-tocotoxi」（『日葡辞書』）。

22・かねてのたまはせむには、底本における「かねのたまはせんには」は、文意不通。書陵部本の「かねてのたまはせんには」を参照して

も理解が難しいが、試みに「前々から殿がおっしゃっているのであれば、それは」という意味で捉えておく。「のたまはす」の敬意の対象は、乳母の発言中の「殿の思し掟てしことども」と照応し、「殿」に向けられていると考えたい。また、「には」の下に「通はざらむ」を補って訳出した。なお、三条西本では「とばかりのたまひて」とあり、前項の「いづちか行かむ」に記したように、「ことことう言ふべきにもあらず」までを会話文として読み解くことが容易である。

23・あやしくすげなきものにこそあれ、さるはいと口惜しからぬものにこそあめれ、宮の心中において、女に対する評価が徐々に形成される文脈。「あやしく」を①「身分が低く」〔新註〕〔由良〕などと解して「すげなき」と並列的に捉えるか、②「不思議なほど」〔全講〕〔角川〕などと解して「すげなき」を副詞的に修飾する語とするかで、文脈の理解が異なる。「すげなき」は女の冷淡さを指す語。かつて宮が訪れても逢えなかった経験など〔注釈稿（1）〕の（6）、および本稿（7）から、このような評価が生じた。「さるは」は「そうではあっても、そのくせ」という逆接の意。訳では①「身分が低い」と解し、乳母の言葉通り「女は身分が低い」という一般的な評価に加え、宮自身の経験から「つれない女である」という認識がある、その一方で、和歌のやりとりなどを通じて「いと口惜しからぬ」愛着が宮の心中に育まれている文脈と解した。②による別解、「あやしく」を「すげなき」の副詞的修飾とみると、「すげなき」と「口惜しからぬ」を対比させ、女の人物像を把握しようとする宮の姿と捉えられる。「あやしく」は「こそあれ／こそあめれ」の連続使用と相俟って、世評と自己の思いの狭間で女の実像に迫ろうとする宮の思いを示す語として作用し、女への評価が揺れ動く文脈を表現するものと把握できる。「こそあめれ」の箇所、三条西本「こそあれ」とあり、応永本のほうが、幾分、宮の主観がよりにじみ出た文脈と捉えられるか。

24・呼びてや置きたらまし、と思せど、底本「をきた、まし」を「起き立たまし」「置き立たまし」としては文意不通。「、」と「ら」の書体類似とみて改める。書陵部本「おきたらまし」とある。「…や…たらまし」はためらい。女を邸に呼んで側近くに置こうか、の意。

25・まして聞きにくきことぞあらむ、など思し乱るるほどに、おぼつかなくなりぬ。「まして聞きにくきことぞあらむ」は、女を自邸に呼び寄せることで今以上にますます悪い噂が立つことへの外聞を気にしているとも解せるし、その噂が自分に跳ね返ってくるのを恐れる気持ちともとれる。「おぼつかなくなりぬ」は、この時期の途絶えが長く続いていくことを示すもの。なお、研究史においては、早くに木村正中「和泉式部日記の特質」（『中古文学論集（第4巻）』おうふう・二〇〇二、初出一九六三）が、この一文に作者としての和泉式部の心が内蔵されていることが検証し、宮と女との間に独自の共感性が働いていることを論じている。（渡辺開紀）

(10) からうしておはして

〔本文〕

からうしておはして、¹「あさましう、心よりほかにおぼつかなくなる、²おろかにな思しそ。³御あやまちとなむ思ふ。⁴かく参り来るを便なしと思ふ人々あまたあるやうに聞けば、いとほしくなむ。⁵おほかたも慎ましきかたに、いとどほど経ぬる」とまめやかに御物語したまひて、「いざたまへ、今宵ばかり。人も見ぬ所あり。心のどかにもの聞こえむ」とて、⁶車をさし寄せて、⁷ただ乗せに乘せたまへば、⁸あれにもあらず参りても、⁹人もこそ聞け、と思ふ思ふ行けば、¹⁰いたう夜更けにければ、¹¹知る人もなし。やをら人も見ぬ廊のあるにさし寄せて下りさせたまひぬ。¹²月もいと明かければ、「下りね」と忍びてのたまへば、¹³様悪しきやうなれば、¹⁴下りぬ。「人も見ぬ所ぞかし。今よりもかやうに聞こえさむ。人などもある折にやと思へば、¹⁵慎ましうてなむ」など物語あはれにしたまひて、¹⁶明けぬれば、¹⁷車寄せたまひて乗せたまひて、「御送りにも参るべけれど、¹⁸明かうなりぬべければ、¹⁹ほかにありけると人の見むもあいなし」とてとまらせたまひぬ。²⁰

〔臨川〕十四才／十五才／一五二／一五三頁

〔校訂〕からうして―〔臨川〕(一六五―一六六頁)に「からうして」の用例が二例あるのに抛り「う」を補う。(書)ほか「からうして」。

〔応永本校異〕(京)からして―(書)からうして (京) いたう―(書) いたう

〔三条西本〕【清水】三〇／三一頁 〔参考〕【本文篇】二一／二三頁・【本文集成】143／155頁

〔現代語訳〕

やつとの思いでいらつしゃって「呆れるほど、心ならずも無沙汰を重ねたが、それをどうか疎略な扱いと思ってくださるな。あなたのせいと思うておるぞ。このように(あなたのもとへ)参りますのを不都合に思う男たちが大勢いるというふうに聞くので、私自身、つらくて。それはさておき、憚られることもあって、たいへん間遠になってしまった」と真面目にお話になって、「さあ、いらつしゃい、今夜だけは。誰にも見られない所がある。(そこで) ゆっくりお話し申そう」と言つて、車を乗り付けて、強引にお乗せになるので、無我夢中で乗り込こんで、こんなことを誰かに聞かれたら困ると思ひながら行つたが、すっかり夜も更けているので、気づく人もいない。(車を) そつと人気のないう廊に乗り付けて、(宮が先に) 降車なさつた。月も明るしい、「降りてしまいなさい」と声を響めておっしゃるし、このままではみつともな

いので、(私も後に続いて) 降りた。「誰もいない所だよ。これからはこうしてお話を申し上げよう。(あなたのもとに) 誰かほかの人が来ているのだろうかと思うと、気が引けてしまうから。」などのお話をしんみりとなさって、夜が明けると、車をお寄せなつて(女を) お乗せになつて、「お送りにも参上すべきなのだが、(これ以上) 明るくなつてしまうと、他所に泊まっていたのかと誰かに見咎められたら困ったことでもある」と言つて、(宮はその場に) 留まりなさつた。

〔注釈〕

1・からうしておはして、「からうして」は「からくして」の変化した語で、やつとのこと、の意。清濁は『古語大鑑』の「からうして」【補説】に従う。「おはして」は「行く・来」の尊敬語。「乳母の目を盗んで」【全集】とする解し方もある。

2・「あさましう、心よりほかにおぼつかなくなる、以下、「いとどほど経ぬる」の部分までが宮の発話となる。「あさまし」は、思つていた以上に、の意。「心よりほかに」を重ねて、極端なほど来訪が遠のいた日々を過してきたことを「おぼつかなくなる」と言っている。「おぼつかなくなる」は、この直前にも見えた表現。また、この期間に為尊の一周忌である六月十三日が過ぎているとする説【全講】がある。

3・おろかになしそ。宮の発話に尊敬語「思し」が出てくるため、敬意の対象は女。「おろかに」は「疎かに」で、冷淡、薄情の意【注釈稿(1)】の(6)。「な…そ」は間に動詞を挟み込んでやわらかく禁止し、「どうか…してくださるな」という響きを持つ言い方。

4・御あやまちなむ思ふ。宮の発話に「御」が出てくるため、ここは女の「あやまち」とするのが通説。【集成】は宮の「自称敬語」である可能性を考慮するが、その場合、帥宮が自らの失態を認める形になり、この辺りの無沙汰の責任転嫁の口調と合わない。「御あやまち」の主たる内容は、次項「かく参り来るを」云々との状況を女が引き起こしている点などを指す。

5・かく参り来るを便なしと思ふ人々あまたあるやうに聞けば、「かく参り来る」は、宮自身が女のもとに参上することをいう。「便なし」は不都合だ、迷惑に思うの意。「便なしと思ふ人々」とは、侍従の乳母に「人びとあまた通ふ所なり。便なきことも、出でまうで来なん」と言われたことに影響されたとみて、「女のもとにかよってくる男たち」【全集】などと解するのが通説。別解、「口さがない世評をたてる人々」【由良】や「おそらくは」宮」とは知らず男が通うことを、迷惑がる人々(通っている男性だけでなく、それを待っている女性たち)が存在するのである【武田『文学攷』】とするものもある。

6・いとほしくなむ。「いとほし」は、①自己に向けてはつらい思いをいう場合と、②他者に向けては、相手をかわいそうだ、気の毒だとい

う場合がある。どちらで解するかで意見が分かれ、ここでは三通りの解し方がある。多くは①の用法に拠って、宮が自身の境遇を「いとほしく」と感じているとする説(【考注】【全講】【由良】【新編】【角川】など)。②の用法とみて、さらにA「便なしと思ふ人々」(【昭完】【全集】など)に悪い気がしてとする説、B「女」の立場を思い遣って「いとほし」と言っているとする説(【学術】【平田】武田『文学攷』など)がある。いずれでも解せるが、「いとほし」が、この後で女を連れ出す口実の一つになる点を重んじて①に従ってみた。

7・おほかたも慎ましきかたに、いとどほど経ぬる」 「おほかたも」は、直前に話題にした男たちについてはさて置き、という形で次の話題に移行する発話(『古語大辞典』)。「かたに」は、方面、それに関する点、の意。三条西本「うちに」。帥宮が女との交際において「慎ましう」方面に気持ちが傾く理由の一つには、親王という「身分柄、慎しまねばならぬ立場」(【新書】)であり、外出が著しく制限されているため。本稿(7)で「今宵もおはしまさまほしけれど、かかる御歩きを人々も制しきこゆるを、…思しつむほほどに」とあった。また、故宮の一周忌まで慎ましくありたい事情もあった模様(【注釈稿(1)】の(5)参照)。

8・とまめやかに御物語したまひて、「まめやかに」を【全集】は「宮の話は、乳母から聞かされた話や、宮の実際の気持ちを率直に語っている」とし、【新編】では『まめやか』は、浮ついたものでなく、まじめで実のあることを感じさせる様子」とする。

9・「いざたまへ、今宵ばかり。人も見ぬ所あり。心のどかにもの聞こえむ」とて、「いざたまへ」は人を促す際に使われる言葉。「さあ、いらっしゃい」という意。女を外出に誘う言葉。「今宵ばかり(今夜一晚だけ)」と限定する狙いは、外出をためらう女の心理的負担を軽減する点にある。「人も見ぬ所あり」云々は、女を人目のない場所へ誘い出し、そこでくつろぎながら語り明かそうという目的を述べるもの。「とて」は、ここでは「〜とおっしゃって」の意。当時、このように女性を邸の外へ誘う行為は、その女性を軽んじることと等しく、先に乳母が「やむごとなき人にもあらず」と述べた評価とも一致する。また、女のもとへの通いを断つか、邸に仕えさせるか迷っていた宮が、あえてそのどちらでもない行動に出たとも言える。ちなみに、本作品の二人の同車行の逸話が、『源氏』「夕顔」などに影響を与えているとする説(島津久基『対訳源氏物語講話 夕顔』(中興社・一九三七)、吉田『研究』など)がある。

10・車をさし寄せて、牛車の停車位置には、寝殿の南階、中門廊、門外などがあり、主客の身分差に応じて、「さし寄せ」る位置が大まかに決められていた(玉上琢彌『源氏物語評釈(第一巻)』角川書店・一九六四・六二頁)。その位置について、「廊にであらう。貴人の邸宅なら「車寄せ」が張り出して設けられたところもあった」(【由良】)とする考えもあるが、宮の高貴な身分を考えると、女の邸の庭にまで入り込み

寝殿や対の屋などに直接乗り付けても不自然ではない。ただし、女の邸の規模や、女の居室が「寝殿」か「対の屋」かは不明。

11・ただ乗せに乘せたまへば、あれにもあらず乗りても、「ただ乗せ」は、「一方的に強制して乗せる。「たゞ乗せ」に乗せるのであって、「たゞ、乗せに乗せ」るのではない」(笠間)という。関谷浩「ただあきに」の構成について」『国語研究』31、一九七一・3)も参照のこと。「あれにもあらず」は、「門も開けたりければ、あれにもあらずながら、降りぬ。」(蜻蛉)などのように用い、「無我夢中で」という意。三条西本「我にもあらず」、寛元本「我にもあらず」という校異があるが、いずれも同じ意味。

12・人もこそ聞け、と思ふ思ふ行けば、「人もこそ聞け」は、女の心内文。「もこそ」は「ししたら大変だ、困る」という危惧の念。当時の女性たちは外出自体が稀であり、まして夜に自邸を離れていることが発覚したら痛恨の恥辱になる。そのような避けるべき状況の中、宮と同行した事実が明るみになるのを心配する女の内奥が描かれたもの。「思ふ思ふ」と、動詞を二つ重ねることで「ししながら」という意を示す。女の危惧を具体的に「車の音を他人に聞かれたら困る」(全集)と解する考えもある。

13・いたう夜更けにければ、知る人もなし。たいそう夜が更けてきたため、気づく人もいないということ。「知る人もなし」は、この直前に「人もこそ聞け」とあったのに対して、女の安堵が強く反映した地の文として押さえることが適切か。

14・やをら人も見ぬ廊のあるにさし寄せて「やをら」は、そつと、の意で「さし寄せて」に係る。「人も見ぬ廊のあるに」の「ある」の下には「ところ」などを補って解せる。ここの「廊」は「中門廊」(図Aの①)。諸注釈は『宮殿調度圖解』(関根正直)の「廊は殿より殿へ渡るべき細殿を廊といふなり。されば通例細殿とも、渡廊とも渡殿ともいへり」という説明に基づき、「寝殿造で、寝殿と対の屋とを結ぶ細長い建物。渡殿」(清水・図Aの②)とするが、その位置に牛車を乗り付けては寝殿や対の屋にいる人々にすぐに気づかれてしまい「人見ぬ」という記述と齟齬をきたす恐れがある。なお、『源氏』では「廊」は「中門廊」を指す用例が多く(『源氏物語事典』東京堂出版)、「廊」と「渡殿」とを区別する説(『源氏物語 鑑賞と基礎知識』(空蟬)『至文堂・二〇〇二)もある。三条西本「人もなき廊に」、寛元本「人もなき廊のあるに」という校異がある。同様の異文対立の例として、『源氏』「人見ぬ廊(河内本「ひとなき廊」)に御直衣ども召して着かえたまう。」(末摘花)①二七三頁／『源氏物語大成』巻一・二〇六頁)がある。

15・下りさせたまひぬ。「させ」は尊敬。「下る」は、車から降りて部屋に入る、の意。ここと表現が類する「人見ぬ方より引き入れて、下ろしたてまつる。」(『源氏』空蟬)に「下ろす」は車から降りして、部屋に招き入れるの意(『新編全集・頭注』)とあるのを参考とする。

16・月もいと明かければ、「下りぬ」と忍びてのたまへば、様悪しきやうなれば、下りぬ。文脈の押さえ方に諸説ある。ここでは、接続助詞「ば」によって列挙される三つの条件句が、それぞれに文末「おりぬ」に係るとした【昭完】の見解に従い、訳出した。「月もいと明かければ、おりぬ」と続け、宮の会話文とする考えもあるが、採らない。この一文の校異が多く、「しのびて」は「しみて（＝強ひて）」（三条西本独自異文）、「さまあしきやうなれば」は「あさましきやうにて」（三条西本、寛元本）とある。

17・「人も見ぬ所ぞかし。今よりもかやうに聞こえさせむ。人などもある折にやと思へば、慎ましうてなむ」など 宮の発話。「人も見ぬ所」は前項（9）を参照。宮の邸の「人も見ぬ所」と女の邸で（逢瀬の際の）「人などもある折」との対照に注意。「ぞかし」は念を押しつつ断定する意を表す。「…なのだよ。…だぞ」の意。三条西本は「さりや、人もみぬ所ぞかし」とある。感動詞「さりや」は、ほらね、いったとおりだろ、という意。ここでの「今よりも」は「今後も」という意味で使われている。女を外出させる際に「今宵ばかり」と言っていたことを早くも反故にする発言になる。「人など」とは、これまで何度も話題に上がった女の元を訪れる男性たちのこと。「慎ましうて」も女のもとに足が遠のいた釈明に繰り返し用いられてきた語。いわば宮の消極的な態度や身勝手さを象徴する語の一つ。ただし、【集成】は、この言動の裏に「他の男性たちに責任転嫁している一方で、乳母の忠言に対する意識が存在する」とする。

18・物語あはれにしたまひて、明けぬれば、車寄せたまひて乗せたまひて、「物語あはれにし」は、しみじみと語り合うこと、さらには逢瀬のあったことも示す。「明けぬれば」は【注釈稿（1）】の（5）参照。「車を寄せたまひて」は、車をお寄せになってという意。続く「乗せたまひて」は、車に女をお乗せになって、という意。

19・「御送りにも参るべけれど、明かうなりぬべければ、ほかにもありけると人の見むもあいなし」とて 宮の発話。「御送りにも参る」とは出迎えた場所まで一緒に行つて女を見送る意志があることを表明したもの。しかし、「べけれど」と言葉を継いでいくことで、実際には見送りができない状況を伝える前置きとなる。「明かうなりぬべけれ」云々は、帰宅する頃にはすっかり明るくなってしまったため、どこかに泊まつて朝帰りしたと誤解されることを避けたいという思いを述べたもの。宮が気にする「人」とは、宮邸内の人々や女房であろう。

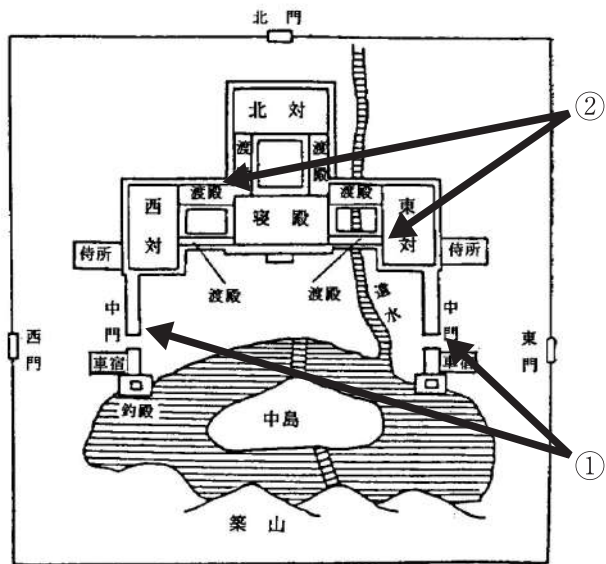
20・とまらせたまひぬ。 三条西本「とどまらせたまひぬ」【全集】は「この言葉によって、宮が女を連れ出した場所は、宮の邸内のどこかの建物であることがわかる」と指摘する。宮の邸、およびこの時の逢瀬の場所は、かつて「冷泉院南院」と言われていたが、森田『論攷』の「南院考」以降は「東三条殿南院」が有力。一説、増田『冥き道』は、この逢瀬の場所を「鴨院」とする。各邸宅の位置は図Bを参照。

(11) 女、道すがら、

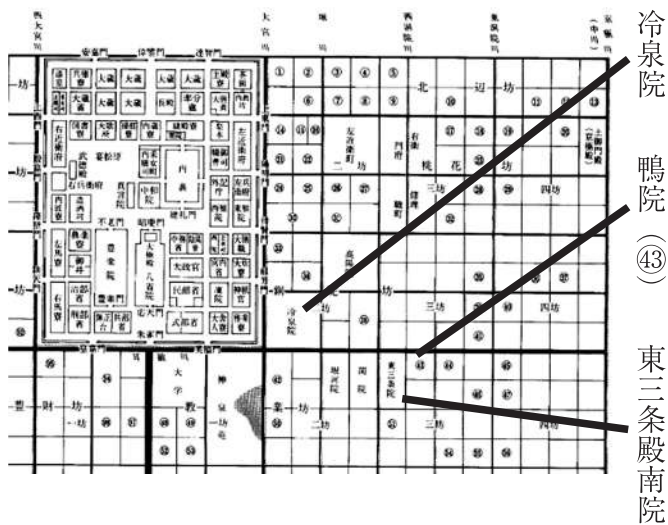
〔本文〕

女、¹道すがら、あやし^{あり}の歩きや、いかに人思ふらむと思へど、
宵³ことに帰しはすれどいかでなほ暁^{あけ}起きは君にせさせじ

応永本『和泉式部物語』 注釈稿 (2)



図A 寝殿造平面図



図B 『国史大辞典』(吉川弘文館・昭和五四) を基に作成。

(渡辺開紀)

苦しかりけり」とあれば、

朝⁵ごとにおくる思ひに比ぶればただに歸らむ宵はまされり

さらにさらにかかること聞かじ。夜⁷さりは方塞^{かた}がりたり。迎へに参らむ」とあれば、あな苦し、常⁸には、など思へど、例の車にておはした

り。さし寄せて、「はやはや」とあれば、さも見苦しきことかな、と思ふ思ふ、ぬざり出でて乗りぬれば、昨夜¹⁰の所にて物語などしたま

ふ。上¹¹は、院の御方に渡らせたまはむ、と思す。明けぬれば、「鳥の音つらき」とのたまはせて、やをらうち乗せておはしましぬれば、道¹⁴す

がら、「かやうならむ折はかならずかならず」とのたまはすれば、「常にはいかが」と聞こゆ。おはしまして歸らせたまひぬ。しばしありて、

御文あり。「今朝¹⁶は憂^うかりつる鳥の音におどろかされて、つらかりつれば、殺しつ。見たまへ」とて、鳥¹⁷の羽根に書きて、

殺¹⁸してもなほ飽かぬかな寝ぬ鳥の折ふし知らぬ今朝の初声

御返し、

いかがとは我こそ思へ朝な朝な鳴き聞かせつる鳥の心は

と思ひたまふるを、鳥の咎^{とが}ならぬにや。

三日ほどありて、月いみじう明かき夜、端²³に出でて見るほどに、「いかにぞ。月は見たまふや」とて、

我²⁵がごとく思ひは出つや山の端^はの月にかけて嘆く心を

例の折よりはをかしきうちにも、宮にて月の明かりしに、人や見けむ、と忍びたりし、思ひ出でらるるほどに、ふと、

一夜²⁷見し月ぞと思へばながむれど心もゆかず目は空にして

と聞こえても、なほ一人ながめたるほどに、はかなくて明けぬ。

〔臨川〕十五才ゝ十七才／一五三ゝ一五五頁

〔校訂〕*「なべて」―（京）「なんて^{（朱・心）}」とある傍記（朱）に拠る。

*「方塞がり」―（京）「またふたかり^{（朱・方）}」とあるミセケチ・傍記（朱）に拠る。

〔応永本校異〕（京）なんて―（書）なへて（京）またふたかり―（書）かたふたかり（京）とかならぬにや―（書）とかならぬ〇^{（にや）}

（京）三日程―（書）三かはかり（京）思は―（書）思ひは（京）かけつつ―（書）影^{かげ}つつ

〔三条西本〕【清水】三一―三四頁　〔参考〕【本文篇】二三―二六頁・【本文集成】155―180頁

〔和歌他出〕30「宵ごとに」歌―ナシ　31「朝ごとに」歌―ナシ　32「殺しても」歌―ナシ　33「いかがとは」歌―『和泉式部集Ⅰ（正集）』

八七〇　34「我がごとく」歌―ナシ　35「一夜見し」歌―『和泉式部集Ⅰ（正集）』八七一

〔現代語訳〕

女は、帰宅の途上、（男女さかさの）奇妙な出歩きだなあ、どのように人は思っているだろうかと思うけれど、あけぼのの宮の御姿の一通りの美しさではなかったご様子も自然と思いだされて、

（これから）宵ごとに帰すことはあるけれども何とかしてやはり暁起きはあなたにさせないわ

（朝一人で帰るのは）つらくて苦しかったの」とあるので、

朝ごとに暁起きをして見送る思いに比べると逢えないままに帰る宵のつらさはもっとまさっているよ（暁起きの別れがどんなにつらくても逢えないよりましさ）。

まったく（宵ごとに帰すなんて）こんな（身勝手な）ことは聞くつもりはない。夜分には（貴女の所は）方塞^{かた}がりになっている。（そちらには泊まれないので）迎えに参上しよう」とあるので、ああいやだ、いつも出て行くななんてありえない、などと思うが、例によって車でおいでになった。（車宿りに）さし寄せて、「速く速く」と急かす声があるので、まったく見苦しいことだなあと思いながら、（目立たないようにそっと）座ったまま出ていって乗ったら、昨夜の所に行つて物語などをなさる。宮の北の方は、宮は冷泉院の住まわれる方にお出かけになったのだろう、と思っておられる。明けてしまうと、「鳥の音つらき」とおっしゃって、そっと車に乗せてお送りにいらつしやったところ、道すがら、「このような折はかならずかならず（同じように）」とおっしゃるので、「いつもはどうでしょう」と申しあげる。（家まで）おいでになってお帰りになった。しばらくして、御文がある。「今朝は無情でうつつとうしい鳥の声に起こされて、とても嫌だったので、殺したよ。見てください。」とあって、鳥の羽根に歌を書いて、

殺してもまだ飽きたらないなあ、夜寝ない鳥が（逢瀬の）時をわきまえず鳴いた今朝の初声は（ほんとうにつらいよ）御返し、

どうしてやろうか、と私の方こそ思うわ、（あなたの来ない夜に）毎朝毎朝鳴き聞かせた鳥の心は（とても冷淡でたまらないから）

と(女は)思い申しあげるが、鳥の罪ではないのかもしれない(ほんとうに薄情なのは宮なのだから)。

三日ほどあって、月のたいへん明るい夜、端に出て月を見ているときに、宮から「どうしているの、月は御覧になっているよね」とあって、歌に、

私のように思いだしているかい。あの夜、山の端の月のように満ち足りないまま去っていった貴女に望みをかけながら(逢えずに)嘆く私の心を

とある。いつもの折より趣き深いなかでも、宮邸で月が明るかった夜に、「人が見ただろうか」とじつと息をひそめていたことが、思いだされるうちに、ふと、

あの夜に見た同じ月だと思うのでしみじみ眺めているが、(そののち貴方の姿を見ることはなく)心も晴れない、目は虚ろなまま空ばかり見て

と申しあげても、(宮の訪れはなく)そのままひとり月を眺めて座っている間に、はかなく明けてしまった。

〔注釈〕

1・女、道すがら、あやしの歩きや、いかに人思ふらむと思へど、「あやしの歩きや」は、奇妙な出歩きだなあ、の意。通常は、男が女を訪れて朝に帰宅するが、ここでは、女が宮邸から帰宅している。諸注、「はしたない出歩き」(【全講】)「みっともない朝帰り」(【由良】)などとする。異例の朝帰りは、結果的に「屈辱的な行為」(【ほる】)かもしれないが、女は、「みっともなさ」や「恥ずかしさ」よりも、むしろ、そこまでして逢おうとする宮に愛情の深さを感じているのではないか。「あやし」は、通常とは異なること。【平田】は、「思えば妙な外出だったこと」とする。また、【新訳】は、「あやしの……思ふらむ」を、「めったにない、不思議な外出だったこと、もし、他人がこのことに気づいたら、どう思うだろうか」と訳している。ただし、「いかに人思ふらむ」は、宮邸の女房などが逢瀬に気づくことを懸念するという。「人」は女以外の人物を漠然と指すわけではない。「他人」とするのは、不適切。

2・あけぼのの御姿のなべてのにはあらざりつる御様も思ひ出でられて、「あけぼの」は、当時の日付変更時点である寅の刻(午前三時)を過ぎて、ほの明るくなる時間をいう(【注釈稿(1)】(5)参照)。なお、「暁」は、「あけぼの」の前のまだ暗い時間。宮は、「暁起き」をし

て女を送り出すが、身支度や、車の準備をさせたりして、実際に女を見送ったのは、「あけぼの」の時分になっていたのであろう。明けの光に浮かぶ宮の姿かたちの美しさを、女は、思い起こさずにはいられない。

3・宵ごとに帰しはすれどいかでなほ暁起きは君にせさせじ 「宵ごとに」の歌から「苦しかりけり」まで、女から宮に贈った後朝の文。女は、ひとり自邸に戻された。そこで、帰宅した男性が贈る後朝の文を女の方から送ったのである。女の後朝の文には、前夜の異常な逢瀬をひとまずは受け入れるものの、今後の外泊は許してほしいという思いが込められている。「宵ごとに帰しはすれど」は、女側が来訪に気づかなかったため、宮が逢わずに帰った五月初めの夜を踏まえる。女は、宵に宮をそのまま帰すことはするが、暁起きはあなたにはさせない、私はこんなにづらいから、と詠む。暁起きは、夜明けに起きて恋人を残して帰ること。逢わない宵よりも、逢ったのちにひとり帰る暁のほうがよりづらいから、というのである。

4・苦しかりけり」とあれば、「苦しかりけり」は、前夜のひとりの帰途を想起しての女の感慨。女には、宮邸など自分の住処ではない場所へ連れ出して逢瀬を持つことをしてほしくないという気持ちがある。

5・朝ごとにおくる思ひに比ぶればただに帰らむ宵はまされり 「朝ごとに」の歌から「迎へに参らむ」までは、宮の返信。「朝ごとにおくる」の「おくる」は、「起くる」と「送る」の掛詞。「朝ごとに」は、女の贈歌の「宵ごとに」に呼応する。女が、朝に自分を置いて帰るつらさを宮に体験させないといったのに対し、朝ごとに女を見送るのもつらいが、そのつらさに比べても、逢瀬もなく帰る宵はいっそうつらい、という。逢えないつらさより逢って見送るつらさの方がまだましということ。初句を、三条西本・寛元本「あさ露の」とする。【清水】は、「朝露のおく明け方に起きて別れる苦しさに比べれば、逢うこともなく空しく帰る宵のつらさの方が、まさっております」と注をつける。歌の趣旨は同じだが、応永本のほうが、「宵」と「朝」の対比が明確で、女に逢わないつらさがより強調されている。

6・さらにさらにかかること聞かじ。「さらにさらに」は、決して、絶対に、の意の「さらに」を重ねて強調した。宮は、女に逢うことを最優先し、女の気持ちに反しても、重ねて宮邸に連れだそうとする。

7・夜さらは方塞がりたり。迎へに参らむ」とあれば、「夜さり」は、夜になる頃、夕刻から夜中にかけての時間をいう。「春されば（春になると）」の「され」と同様。「方塞がり」は、女の家が宮邸から見て天一神など陰陽道の神が巡行する方角に当たり、泊まることのできないことをいう。後文に「例の車にておはしたり」とあるように、「方塞がり」であっても宮は夜に女の家までは来ている。宮は、女と逢瀬を持

つために、「方塞がり」を口実に女を迎えに行つて、自邸へ連れ出そうとしている。

8・あな苦し、常には、など思へど、例の車にておはしたり。「あな苦し、常には」は、宮の返信を受けて、連夜の外出について強く躊躇う、女の心情をいう。女は、外出をしたくなかったが、宮はいつものように車でやつて来た。

9・さし寄せて、「はやはや」とあれば、さも見苦しきことかな、と思ふ思ふ、ぬざり出でて乗りぬれば、宮は、女の乗車を促した。なお、「はやはや」は、宮の意を受けた従者などの声であろう。先回の外出の帰途、女は人目を気にかけ、また、宮への後朝の文で、「苦しかり」と言っている。ここでも、迎えの車に乗つて外出することを「見苦しきこと」と思う。「ぬざりいづ」は膝行して車に向かうこと。

10・昨夜の所にて物語などしたまふ。「昨夜の所」は、昨夜、宮が女を連れ出して、夜を明かした所。本稿(10)を参照。

11・上は、院の御方に渡らせたまはむ、と思す。「上」は、宮の北の方のこと。諸注「院の御方に」「たまはむ」を、宮の北の方が宮のその夜の動向を推測した心内語とする。【新訳】は、「上は」「たまはむ」を宮の心内語とするが、「渡らせたまはむ」と最上級の敬意を表す二重敬語が使われていることから、「渡る」主体は宮とすべき。なお、「院」については、【學術】に「ここでは帥宮と共に南院に住んでおられた冷泉院を指す」との指摘がある。より詳しくは、森田『第二』「南院攷」を参照のこと。冷泉院は、帥宮の父にあたる。「院の御方」は、南院のなかの冷泉院の居住するエリアのこと。上は、宮が自分の居住エリアから南院内部の「院の御方」を訪ねたのだろう、と推測したのである。

12・明けぬれば、「鳥の音つらき」とのたまはせて、「明けぬれば」は、日が改まったことをいう。吉海直人『源氏物語』の時間表現『新典社・二〇二二』など参照。女と宮は、鶏鳴によつて日付の転換(の近いこと)を知った。「鳥の音つらき」は、「こひこひてまれにあふよのあかつきはとりのねつらきものにざりける」(古今六帖・二七三〇・暁におく・作者不詳)を引く。別れの時である暁の到来を知らせる鶏鳴は、恋人たちにとってはないほうがよい。宮は、引き歌表現「鳥の音つらき」によつて、女への恋情を表明し、「まれ」に逢った一夜の終結を告げる鶏鳴を「つらき」とする。なお、寛元本は「とりのつらきことのたまはせて」とする。【中嶋】は、「寛元本は現実に一番鳥の鳴く声で起きたかのような文である」と評する。

13・やをらうち乗せておはしましぬれば、「そつと女を車に乗せて(女の家)にお行きになったので」の意。三条西本は、「やをら奉りておはしぬ」とする。応永本の「うち乗せて」の方が、宮の気遣いが感じられるか。前夜と違って、宮は女を家まで送り届ける。女の「苦しかり」に配慮したか。

14・道すがら、「かやうならむ折はかならずかならず」とのたまはすれば、「常にはいかが」と聞こゆ。「かやうならむ折」は、(方塞がりなどが原因で)、女の家で逢瀬が持てないような折。女は、いつもは無理だと返す。「かならずかならず」のくり返しに、無理をしてでも逢いたいと思う宮の恋情の強さが出ている。

15・おはしまして帰らせたまひぬ。しばしありて、御文あり。宮は、女の家まで来て帰り、すぐに文を寄こした。

16・「今朝は憂かりつる鳥の音におどろかされて、つらかりつれば、殺しつ。見たまへ」とて、宮の後朝の文の言葉。三条西本(寛元本も同様)は、「今朝は鳥の音におどろかされて、にくかりつればころしつ」とのたまはせて」とする。底本の「憂かりつる」は、「鳥の音」が、つらい感情を呼び起こす存在であったことをいう。「おどろかされて」は、起こされて。「つらかりつれば」は、「鳥の音」に喚起された宮の感情をいう。三条西本の「にくかりつれば」は、「鳥(の音)」を憎む宮の感情をいう。三条西本の方がより直截な表現になっている。「殺す」の用例は、『うつほ』『源氏』など王朝作品に散見する。ここでは、『枕草子』「上に候ふ御猫は」の「それは『打ち殺して捨てはべりぬ』とこそ申しつれ。二人して打たむには侍りなむや」など申せば」をあげておく。

17・鳥の羽根に書きて、三条西本「鳥の羽に御文をつけて」とする。鳥の羽に文を結びつけたことになる。【中嶋】は、「応永本の「鳥のはねにかきて」は直接に鳥の羽に書き付けたとも読めるが、付け物としての鳥の羽のことをいうのであろう」という。『和泉式部集I』(八七〇)の詞書は、「とりのこゑにはかられて、いそきいて、にくかりつればころしつとて、はねにふみをつけてたまへれは」とする。伊藤『伝本攷』は、三条西本の本文を「表現の上では……穏当なもの」とする。ただ、底本に即して読むと、鳥の羽に直接、「殺しても……」の歌を書いたとすべきか。朝一番の鶏鳴によつて別れを促す鶏への憎しみをより強く印象づけたことになる。「鳥の羽根」に歌を記した例は、見つけられなかった。しかし、『日本書紀』(敏達天皇元年五月)の記事に、鳥の羽根に書かれた高麗の上表を、王辰爾が帛(ねりきぬ/絹布のこと)に転写し読み取ったとの記事がある。いわゆる、「鳥羽の表」の故事である。同記事は、『懷風藻』の序に触れられているほか、『金塊和歌集(第二度本)』「わが恋はからすばにかくことのはのうつまぬほどはしる人もなし」(四二二・藤原顕季)に引用されている。また、『十訓抄』(第七・五)に同じ故事が載る。事実として鳥羽に書かれたかどうかはわからないが、鳥の羽根に文字を書く行為は伝承としてはありえたのである。同時代には、「切懸の」けづりくづ(『大和』四十三段)、「柳の枝」(『うつほ』春日詣)、「山吹の花びら」(『枕草子』「殿などのおはしまさで後」)、「紅葉」(『後撰集』・四五八)など、紙以外の小さなものに歌などを記した例は少なくない。なお、藤岡忠美「木の葉

に書かれた恋歌」(『平安朝和歌 読解と試論』風間書房・二〇〇三、初出一九九七)、岡田ひろみ「平安中期の「折枝」表現」(『表現研究』103、二〇一六・4)、原豊二「書きつける」者たち」(『日本文学』65、二〇一六・5) など参照。

18・殺してもなほ飽かぬかな寝ぬ鳥の折ふし知らぬ今朝の初声 宮の後朝の贈歌。第三句、底本「ねぬ鳥の」。三条西本「にはとりの」、寛元本「ねぐらどり」とする。底本「ねぬ鳥」は、夜寝ないで朝を告げる鶏のこと。応永本「ねぬとり」、寛元本「ねぐらどり」の用例は、他にない。『伊勢物語』十四段に、女の歌として「夜も明けばきつにはめでたかけ(=鶏の古名)のまだきに鳴きてせなをやりつる」があり、鶏鳴を憎み、鳥を殺すという趣向が似る。応永本「今朝の初声」は、逢瀬の夜に翌朝の到来を告げる鶏鳴。「寝ぬ鳥の」と響きあう。三条西本「今朝の一声」。『楽府詩集』(読曲歌・無名氏)「打_{シテ}殺_{シテ}長鳴鶏_ヲ」弾_シ去_ル、鳥曰鳥願_{ハクハ}得_テ連冥_ヲ不_レ復曙_{ナラ}、一年都_{ベテ}一曉_{ナルヲ}」によるとする説がある(【最新】【朝日】【集成】など)。

19・御返し、「殺しても」への返歌、次項の女の歌「いかがとは」を指す。

20・いかがとは我こそ思へ朝な朝な鳴き聞かせつる鳥の心は 三条西本、第一句「いかにとは」、第五句「鳥のつらさは」。寛元本、第一句「いかにとは」、第五句「鳥をころせば」。『和泉式部集I』に「いか、とはわれこそおもへ朝な／＼なをきかせつ、鳥のころせば」(八七〇)の形で載る。佐伯梅友・村上治・小松登美著『和泉式部集全釈』(笠間書院・二〇一二、初出一九五九)は、「いかがとは」の「いかが」の下に「せむ」が略されているとする。【由良】も同様。従いたい。「(鳥を)」どうしてやろうか」の意。「朝な朝な」以下、女は、二人の逢瀬の邪魔をする鶏鳴ではなく、宮の来訪がなく独り夜を過ごしたあとの鶏鳴に焦点をあてる。朝が来るたびに鶏鳴を聞かせ続ける鳥の心は本当におもいやりがなく冷淡だ、という。朝ごとに鶏鳴を聞かせる「鳥の心」に、訪れない宮の(冷淡な)心を重ねるとともに、朝に鳴く鳥と同じく女自身も独り朝を迎え泣いていることをいう。結果として宮を非難し、贈答の定法のとおり、宮に反駁する歌になっている。

21・と思ひたまふるを、鳥の咎_{とが}ならぬにや。 三条西本は、「と思ひ給ふるも、にくからぬにや」とあり」とする。寛元本も同様。「とあり」によって、「と思ひ……にくからぬにや」を、和歌につづく女の書簡の一部と位置づける。「とあり」のない応永本系本文によれば、この部分は、女の心情に重なる地の文とみるのが妥当。「たまふる」は、謙譲の下二段動詞「たまふ」の連体形。「を」は、逆接の接続助詞。全体として、「とお思いするのだが」の意。なお、平安時代中期の助詞「を」を格助詞とする説もあるが、その場合も、文脈としては、逆接的な意味となる。「鳥の咎ならぬにや」は、いわゆる草子地。「鳥の罪ではないのかもしれない」の意。語り手は、女的心情に寄り添って、薄情なの

は、朝ごとに鶏鳴する鳥ではなく、訪れない宮であり、罪は宮にあることを示唆する。

22・三日ほどありて、月いみじう明かき夜、宮の来訪も音信もないまま三日ほどが過ぎてからの、「月いみじう明き夜」をいう。宮が初めて女を宮邸へ連れ出した夜も、「月もいと明かければ」と語られていた。その夜を想起させる、月の夜である。

23・端に出でて見るほどに、端に出て、女が月を見ていた時に、宮の文が届く。応永本「はしに出ゐて」三条西本「はしにゐて」黒川本「いてゐて」。ここの「端」は、【學術】のいうように廂の間であろう。後文、七月に近い「月の明かき夜」に宮が女を訪問した記事に「女、端に眺めてゐたるほどに、人の入り来れば、簾うちおろしてゐたれば」とある。

24・「いかにぞ。月は見たまふや」とて、宮の使者が届けた宮の文の言葉。「いかにぞ」は、どのようにしているのか、の意。宮は、女が当然、逢瀬の夜を偲んで、端に出て月を見ているだろうと推測したうえで、「どうしているの、月は御覧になつてゐるよね」と問う。大野晋『古典文法質問箱』（角川ソフィア文庫・一九九八）は、「や」と「か」の違いについて、「や」は、自分でそう確信しているということを相手につきつけて、その下に「いかに」という言葉を補う表現だった。「か」は、事態が判断不能だ、わからないと言いつ切る形です。（傍線は、稿者）」と説く。宮の発話になじむ指摘であろう。

25・我がごとく思ひは出づや山の端の月^はにかけつつ嘆く心を 宮の歌。書陵部本は、「月にかけつつ」を「月に影^{かげ}つつ」と表記する。「影」は、当て字だろう。「かけ」は、「（思いを）かける」「（願い）をかける」の「かく（掛・懸）」。宮は、月にこと寄せて、女に、自分と同様に宮邸（南院）での逢瀬の際に見た月（宮はあえて「山の端の月」としたか）を思い出すよね、と問いかける。「山の端の月」は、山の端にかかる月。宮邸の西の中門廊から車寄せに出る妻戸を開けて女を見送る際に、簾越しに見たか。【ほる】は、「山の端に入ろうとする月。女を月になとえる」と注をつける。【由良】は、在原業平の「あかなくにまだきも月のかくるるか山の端にげて入れずもあらなむ」（古今集・八八四／『伊勢』八十二段）を引いて、「山の端に入ろうとする月は、惜しみなく嘆く氣持を誘う」とする。ここの「山の端の月」は、業平歌を踏まえる表現であろう。上句の「あかなくにまだきも月のかくるるか」を響かせる。宮は、満足しないまま別れざるを得なかった先夜の嘆きの共有を、女に求める歌。なお、このあたり、六月記事である蓋然性が高く、故宮の一周忌（六月十三日）との関連を考えるべきであろう（本稿（8）参照）。和泉式部の詠歌に「暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照せ山の端の月」（拾遺集・一三四二／和泉式部集Ⅰ・一五〇）がある。世俗の「暗き道」を離れ、「山の端の月」の照らす、仏道を求める歌である。『拾遺集』詞書には、書写山円教寺開祖性空上人の名が

見える。同歌との関連を重視し、「我がごとく」歌を、故宮の一周忌を思い宮が女に仏による救済の願いの共有を求めたものとする、見解が、松島毅『和泉式部日記』における二つの〈山の端の月〉（『古代中世文学論考』31、二〇一五）、渦巻恵「和泉式部と帥宮の物語」（倉田実編『王朝人の婚姻と信仰』森話社・二〇一〇）にある。

26・例の折よりはをかしきうちにも、宮にて月の明かりしに、人や見けむ、と忍びたりし、思ひ出でらるるほどに、ふと、女は廂の間の端から月を眺めている。その折に、宮から月夜の逢瀬を思い出させる歌が送られてきたので、より趣深く感じる。先夜の宮邸での逢瀬の際に、女と宮は月の明るいことを気につけ、人が見るだろうかと思念して、息をひそめて過ごしていた。月の明るさに、その夜のことが自然と思ひ出されるのである。「ふと」は、あまり考えることなく、自然に次の「一夜見し」の歌が思い浮かんだことをいう。

27・一夜見し月ぞと思へばなぐれど心もゆかず目は空にして 女の返歌。「一夜見し月」は、先夜見たのと同じ月ということ。「眺むれど」は、宮の言葉の「月は見たまふや」への返答。「心もゆかず」は、気が晴れないの意。宮邸からの帰宅の後、訪れがないことを踏まえる。「目は空にして」は、目はぼんやりと空においたままでの意。「空」は、うわの空の「空」と天空の「空」を掛ける。『和泉式部集Ⅰ』「つれづれと空ぞ見らるる思ふ人天下りこむものならなく」（八一）と恋人の降臨（来訪）を希う心情が共通するか。

28・と聞こえても、なほ一人ながめあたるほどに、はかなくて明けぬ。「と聞こえて」は、「ひと夜見し」の歌を宮に届けたことをいう。宮の贈歌があり、女が答歌を返した以上、この夜の宮の来訪は基本的にない。それでもなお、来訪を願って一人で空を眺めているうちに明けてしまったのである。

（山下太郎）

（12）またの夜おはしましたりける

〔本文〕

またの夜おはしまし¹たりける、こなた²には、片方^{かたかた}人の住む所なりければ、そなたに人の来たりける車を御覧じて、「人の侍るにこそ。車侍り」と聞こゆれば、よし、⁴帰りなむ」とておはしましぬ。⁵人の言ふはまことにこそ、と思すもむつかしけれど、さすがに、絶え果てむと思さざりければ、文遣はす。⁶昨夜参りたりとばかりは聞きたまひけむや。⁷それもえ知りたまはざりしにやと思ふこそいみじけれ。

⁸松山に波高しとは見てしかど今日のながめはただならぬかな

とあり。雨うち降るほどなり。あやしかりけることかな、人の、空言そらごを聞こえたりけるにやと思ひて、

君をこそ末の松とは思ひつれひとしなみには誰か越ゆべき

と聞こえつ。宮は一夜ひとよのことをなま心憂く思ひて、久しうのたまはせで、かく、

つらしともまた恋しともさまざまに思ふことこそ絶えせざりけれ

御返り聞こゆべきことなきにしもあらねど、わざと思されむも恥づかしくて、かくぞ、

逢ふことはとまれかくまれ嘆かじをうらみ絶えせぬ仲となりなば

と聞こえさするも、なほ間遠になむ。

月の明き夜、うち臥して、「うらやましくも」などながめらるれば、宮にかうぞ聞こえける。

月を見て荒れたる宿にながむとは見に來ぬまでも誰に告げよと

樋洗童して、「右近の將監せうぞうにさし取らせて來ね」とて遣る。宮は、御前ごまへに人々して御物語しておはしますほどなりけり。まかでなどして入ら

せたまふに、右近の將監さし出でたれば、「例の車に装束せよ」とておはします。

〔臨川〕十七才十九才／一五五／一五七頁

〔校訂〕*とまれかくまれ―(京)「とまれかくされ」。底本の誤写とみて、(書)その他により改める。

*ながめらるれば―(京)「なかめしるれば」。三条西本・寛元本により改める。

*かうぞ―(京)「こうそ」。歴史的仮名遣いにしたが改める。

*右近の將監―(京)「右近のろう」。(書)により改める。

〔応永本校異〕(京)御返り―(書)御返は ※なお、底本「り」を「わ」と読み、「り」の誤写あるいは(書)における「は」を「わ」と

誤ったものとの理解がある〔狩野〕〔由良〕。『本文集成』は「り」と読んでいる。注釈者も「り」と判読した。(京)とま

れかくされ―(書)とまれかくまれ(京)なかめしるれば―(書)なかめしらるれば(京)こうそきこえける―(書)かう

そきこえける(京)右近のろう―(書)右近のろう

〔三条西本〕【清水】35／37頁 〔参考〕【本文編】二六／二九頁・【本文集成】180／201頁

〔和歌他出〕 36 「君をこそ」歌―『和泉式部集Ⅰ（正集）』八七二

37 「逢ふことは」歌―『和泉式部集Ⅰ（正集）』八七三

38 「月を見

て」歌―『和泉式部集Ⅰ（正集）』二二〇、第三句「詠れば」、第五句「なれに告げよと」

〔現代語訳〕

次の夜お越しになった、こちらでは、邸の片側が他の人の通う所であつたので、そちらに誰かが来ていた車を御覧になって、（お供の従者が）「誰かがおりますぞ。車がごぞいます」と申し上げるので、「もういいや、帰ろう」といつて立ち去っておしまひになった。人が言うのは本当だったのだ、とお思ひになるにつけても不愉快だが、とはいえ、これつきりにしてしまおうとお思ひではなかつたので、手紙をお遣わしになる。「昨夜私がお邪魔したとくらいはお聞きになったでしょうか。そのこともお気づきになれなかつたのではと思うとたまらない。

あの末の松山を越えそうなほど波が高いと、つまりあなたを浮気な女性であると見てはいたけれども、今日の長雨が尋常ではないように、今日の私の物思ひは並一通りではないことですよ。

とある。雨が降る頃である。奇妙なこと、誰かが、偽りをお耳に入れたのだろうかと思つて、

あなたのことをこそ浮気な人とわかりました。そのあなたと同様に誰が浮気などしたりしましょうか。

と申し上げた。宮は、昨夜のことをわりきれなくお思ひになって、長いこと何もおつしやらず、（ある時）このように、

あなたを「薄情だ」とも、また「恋しい」とも、様々に思つてやまないことです。

お返事は申し上げるべきことがないわけではないけれど、わざわざとつてつけたようにお思ひになるだろうと思うと気が引けて、このように、

お逢ひすることは、どうあれ嘆かないつもりです。お互いを恨み憎むことが絶えない仲になってしまったのなら。

と申し上げるが、やはりおいでは途絶えたままで。

ある月が明るい夜、横になって「うらやましくも」といった思ひで眺めずにはいられないので、宮にこんな風に申し上げた。

「月を見て荒れた家で物思ひに沈んでいる」ということを、「見に来い」とまでは言わないにしろ、誰に告げたらよいのでしょうか。

樋洗童を「右近の将監に手渡して来るんだよ」といつて遣わす。宮は、御前で人々とともにおしゃべりをしていらつしやるところだった。

人々が退出などしてから（自室に）お入りになると、右近の將監が現れたので（右近將監から渡された、女からの手紙をお読みになって）、「いつもどおり車に出かける支度をせよ」といってお出かけになる。

〔注釈〕

1・またの夜おはしましたりける、前場面を承け、その次の夜である。宮が女を訪れるのだが、前もって来訪を告知していないため、本場面での事件が発生することとなる。なお、三条西本では「おはしましたりけるも、こなたには聞かず」、寛元本には「おはしましりけるをこなたには聞かず」とあり、女が宮の来訪を承知していないことが明示されているが、応永本にはその旨の記述がない。

2・こなたには、^{かたかた}片方人の住む所なりければ、そなたに人の来たりける車を御覽じて、前項にも示した通り、三条西本・寛元本では「こなたには聞かず」と続くので、「こなた」の語は、女あるいは従者なども含めた女側の人々を指す言い方になるが、応永本は、「人の住む所なりければ」に係るので、女の住まいを指していることになる。その場合、構文上は「こなたにはそなたに……」という対比関係が企図されているようにも思われるが、一つの邸内において、その一部に「人の住む所」があると見做さざるを得ないので、ここでは、「こなた」を女の住まい全体、その一部分である「人の住む所」を「そなた」と表現しているものと見る。「かたかた」は「方々（＝あちこち）」か「片方（＝片側）」とするか微妙だが、「人の住む所」が邸の「そなた」側にあるというのが応永本の論理だと思われるので、その点を重視して「片方」と解する。【笠間】が「片方（邸の片側半分）」を明確に打ち出している。【竹野】【新註】は、「別殿」【竹野】・「一構への邸のうちで別々に」【新註】と説明する。「住む」は、「結婚生活を営む」意で、同居の場合はもちろん、通いの場合にも用いられる。一例、「業平朝臣、紀有常が女にすみけるを、恨むることありてしばしの間、昼は来て夕さは帰りのみしければ……」（古今集・七八四・恋歌五・詞書）。この場面は車が来ているわけであるから、同居していない状態である。邸の片側に住む女性に、通ってくる男がいたのである。邸を共有していることから、この女性は女にとって親族にあたる可能性が高い。实在の和泉式部に即して考える場合、その妹との同居の可能性がしばしば想定されている。「御覽じて」の主語は、当然宮となる。この箇所、【中嶋】が（「注釈者注、三条西本における）その部分の記述からすると、応永本の『御覽じて』は不備であろう」と説くが、両本を対等の立場で見比べれば、応永本の方がわかりやすいのは間違いない。

3・「人の侍るにこそ。車侍り」と聞こゆれば、伝本三系統間で異同の多い箇所。底本を含む応永本では、「人」と「車」に対して丁寧語「はべり」が用いられていること、またその発話が「言ふ」の謙讓語「聞こゆ」で待遇されていることから、従者の言葉となる。主語の明示

がないので、発話者が右近将監か小舎人童かその他の従者なのかは特定できない。三条西本はこの部分、「そなたに來たりける人の車を、車侍り、人の來たりけるにこそ、とおほしめす」となっていて、「車侍り」が宮の心内語とも読めてしまい、不整の感を免れない。この箇所に関しては寛元本が最も達意で、従者が目撃した事柄を宮に報告し、それに基づき宮が行動を判断するという流れが明快にわかる。【笠間】は、前項部分と含めて三系統間の異同に関し、「(注釈者注、三条西本に対する応永本・寛元本) 両本の異文は本段全体の、また日記全文に通ずる簡潔な力強さにくらべ、説明的、冗漫で、いかにも異質である」と説くが、文章として不備であることは間違いない。この部分に関しては、森田『論攷』が「三条西家本における最大の欠文箇所」だとし、前後二箇所の「にこそ」(注釈者注、『論攷』本文では「とこそ」と、誤植になっている)に端を発した脱落だと指摘するように、やはり三条西本本文に何らかの損傷があると見ざるを得ないのではないか。

4・「よし、帰りなむ」とておはしましぬ。「よし、帰りなむ」は、宮の発話。「よし」は、不満足のまま諦めたり、許容したりする意の表す副詞(辞書により感動詞)。宮は、先客の車を、女のもとに別の男が通ってきているものと勘違いし、そのまま帰ってしまったのである。

5・人の言ふはまことにこそ、と思すもむつかしけれど、さすがに、絶え果てむと思さざりければ、文遣はず。「人の言ふはまことにこそ」は、「こそ」の後にありうべき「あれ」などが省略された形。「人の言ふ」は、女の異性関係に関する噂のこと。本稿(9)を参照、さらに遡り、(8)にも「好きごとする人々はあまたあめれど」という女の心中思惟が記されていて、それらの噂が根も葉もないことでもなかったことが知られる。「さすがに」は、「やはり」「そうはいっても」の意で、前述の事柄からすれば、その後の行動や状態を改めることもあり得るのに、それ以前の方針が継続されることを表す。「果つ」は、「完全にする」の意の補助動詞。この箇所、三条西本「絶えはてんとはおぼさざりければ」、寛元本「絶えはてむものとはおぼさざりければ」とあり、応永本よりやや強いニュアンスである。

6・「昨夜参りたりとはかりは聞きたまひけむや。宮からの手紙の本文部分前半。三条西本・寛元本は「ばかり」を欠く。「ばかり」は程度を表し、ここでは醜化の役割も果たしているが、その分、やや嫌味な感じになる。

7・「それもし知りたまはざりしにやと思ふこそいみじけれ。宮からの手紙の本文部分後半。「それ」は、昨夜宮が来訪したこと。この箇所、伝本三系統間にはほぼ異ならないものとみなせる(三条西本のみ「いと」いみじけれ」と、「いと」が付く)が、意外にも、「え知りたまはざりし」における「えゝず」の不可能表現を見逃して訳している注釈が多い。はつきり不可能表現を訳出するのは【昭完】【集成】くらいである。この不可能表現は意外に重要で、不可能であることによって、それだけ相手(女)が「おとりこみ中」であったというニュアンスを生じさ

せ、結果的に、後の「いみじけれ」がより強調される効果がある。「いみじ」は、程度がはなだしいことを表す形容詞であるから、その内実は文脈から割り出す必要がある。ここでは、せっかく女を慕わしく思って訪れたにも関わらず、逢えないどころか（誤解だが）浮気の現場を見せつけられることになった宮の怒りと落胆が同時に表現されているものと考え、「たまらない」と訳した。

8・松山に波高しとは見てしかど今日のながめはただならぬかな「松山」「波」が詠み合わされていることから、「君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪もこえなむ」（古今集・一〇九三・東歌）を踏まえた歌であることは動かせない。諸注も一樣に指摘している。『歌枕歌ことば大辞典』（角川書店・一九九九・項目執筆は松本真奈美）は、前掲古今集歌を踏まえつつ、男女の約束が違えられた嘆きを歌う「ちぎりきなかたみにそでをしほりつつすゑのまつ山なみこさじとは」（後拾遺集・七七〇・恋四・清原元輔）の、後世への影響の大きさも指摘する。「波高し」の表現は、意外に珍しく、用例はさほど多くない。先行する例としては、「波高くまつのか、れる世にやあらん頼みていくそたびか越すてふ／末の山昔よりまつ君を、きて波高くとも越さじとぞ思ふ」（信明集Ⅲ・四九・五〇）が挙げられようか。古今集歌、元輔歌を踏まえれば、「波高し」は、まだ波が山を越えそうではあるがそこには至らない、すなわち、浮気な性格ではあるが浮気するまでには至らない、といったニュアンスを表していることになろう。「見てしかど」の「てしか」は完了の助動詞と過去の助動詞の連語で、逐語訳的には「見てしまっていたが」つまり、「過去の時点で既にわかつてはいたのだが」の意。したがって上の句は、「あなたがいつでも浮気しかねない人である」とわかつてはいたのだが」という意味になる。「今日のながめ」は、具体的には（誤解だが）、昨夜、女のもとにやってきた男の車を、宮が目撃したことから発した物思いのこと。この「ながめ」に「長雨」が掛けられていることを指摘する注釈も多い。直後の「雨うち降るほどなり」は、掛詞を踏まえた読解を喚起するための一文であろう。これについては次項で触れる。宮が以前から「波高し（浮気な女だ）」と見ていたところに、「長雨」のために水量が増し、いよいよ波が松山を越え（浮気の現場を目撃した）、その衝撃から物思いに沈んでいるという論理を構成する点では、「雨うち降るほどなり」「ながめ（長雨）」は、一定の効果を發揮しているといえる。

9・とあり。雨うち降るほどなり。直前の歌に用いられた「ながめ（長雨）」を裏打ちする叙述といえるが、文脈的には違和感をぬぐえない。このあたり、本稿（10）～（11）は月下の出来事として描かれており、作品内で雨が降り続く状況は、五日以上前のことになると思われる本稿（8）「五月六日」の記事までさかのぼることになる。

10・あやしかりけることかな、人の、空言を聞こえたりけるにやと思ひて、「あやし」は、不思議だ、奇妙だ、の意。何のおぼえも前触れも

なく浮気を責める手紙が届いたわけなので、女としては事態が呑み込めない。ただ内容が異性関係のことであることは一読してわかるので、女の方は「誰かがためを宮に伝えたのか」と推量するくらいしかできない。「聞こえ」は「言ふ」の謙譲語で、主語は「人の」。「にや」の後に、結び「あらむ」などが省略された形。

11・君をこそ末の松とは思ひつれひとしなみには誰か越ゆべき 第三句「思ひつれ」は、応永本の独自異文で、三条西本・寛元本は「ききわたれ」となっている。「ききわたれ」なら、これまでの間にそうした噂を聞き続けてきたとの意であるが、「思ひつれ」であれば、「そのように思い至った、判断した」の意になる。「ひとしなみ」は、「同等」「同列」。「なみ」にはもちろん「波」が響いている。何が同等・同列のもの意識されているかを探せば、それは宮に他ならない。つまり、この歌の主意は、「私（女）はあなた（宮）と同じような浮気者ではない」となろう。ここでの贈答は、典型的な「言い争う」型のものであり、類型的とすらいえるものだが、実は、女の側には宮を浮気だと非難する具体的な材料はないわけなので、これはこれで、女の宮に対する言いがかりであり、このようにしか返せなかったということであろう。こうした、いかにも型にはまった贈答は本作品ではむしろ珍しい。突然あらぬ疑いをかけられて、余裕を失った女が、動揺のせいで型どおりの歌しか返せなかったと読むべきであろう。

12・と聞こえつ。宮は一夜のことをなま心憂く思ひて、久しうのたまはせで、かく、「一夜」は「先夜・昨夜」の意。応永本の諸本はすべて漢字表記。三条西本「ひと夜」、寛元本「ひとよ」に拠り「ひとよ」と訓む。「一夜のこと」は、女のもとに通ってくる男の車を目撃したこと（宮の誤解だが）。「なま心憂く」の「なま」は接頭語で、未熟・中途半端・なんとなく、の意。不完全・不十分が意味の核。ここでは、「心憂」の状態が中途半端であることを意味しているとして、はつきり怒るわけでも悲しむでもないところから「わりきれなく」と訳した。

13・つらしともまた恋しともさまざまに思ふことこそ絶えせざりけれ 宮の歌。三条西本・寛元本は第五句「ひまなかりけれ」。「つらし」は、他者から自分への非友好的な行動について感じる苦痛を表現する。つまり、ここでは、女が自分に対して一途でないことから生じる心理的苦痛をいう。「恋し」は、相手を慕わしく思う感情を表す。女を非難がましく思いながら慕情も捨て去れない宮の感情が直接的に訴えられた歌といえる。【學術】は、この歌の背景として、「まちかくてつらきを見るはうけれどもうきはものはこひしきよりは」（後撰集・一〇四五・恋六・よみ人しらず）を挙げるが、この場面と後撰歌とは、状況や「つらし」の使い方にやや相違がある。さらに、【角川】も、「つらしとはおもふものから恋しきはこころもあらぬこころなりけり」（拾遺抄・三四一・恋下・よみ人しらず／拾遺集・九四六・恋五（四句目

「われにかなはぬ」が踏まえられていると指摘するが、この歌と当該歌との成立に関する前後関係は不明である。

14・御返り聞こゆべきことなきにしもあらねど、女としては、そもそも身に覚えのないことであるから当然弁解も反論もすべきことがある。

15・わざと思されむも恥つかしくて、かくぞ、「わざと」は「意識的に」「ことさらに」の意。ここでは、前項「聞こゆべきこと」、弁解や反論は当然あるのだが、それをする「わざと」になる、ということ。すなわち、本来ないことに對してことさら弁解するのは、ないものをあえて作り出してしまっているような状況になり、結果として、取り繕った印象を宮に与えることになるとの女の懸念が表現されていると考え、「わざわざと」ってつけたように」と訳出した。「かくぞ」は、後項「聞こえする」を結びとすべきも、文が続いたため、流れたものか。

16・逢ふことはとまれかくまれ嘆かじをうらみ絶えせぬ仲となりなば 底本第二句「とまれかくされ」。底本は、「万(ま)」の草仮名体を

「左(さ)」に見誤ったものか。書陵部本により改めた。三条西本は「とまれかうまれ」「とまれかくまれ」「とまれかうまれ」は、ともに「ともあれかくもあれ」の転。「どうであるにせよ」「ともかく」の意。和歌に使用されることは大変珍しい(というより、他に用例を見ない)。「を」は詠嘆の間投助詞。上の句と下の句は倒置の関係になる。従来の注釈では、この倒置を認めていないか、意識しておらず、結句の

後に「つらし」「かなし」の意味を補って解釈するものが多いのだが、下の句が仮定条件であり、上の句が打消意志あるいは打消推量であるわけだから、一首全体の形として「くならば……するまい(ないだろう)」と倒置で理解する方が、書かれていない内容を外から補うより整合性が高いはずであろう。したがって「互いを恨むことの絶えない仲となつてしまったのならば、恋人として『逢う』ことはともかく(どうなろうとも)嘆くまい」というのが歌意だと考える。最初は女の浮気を責める強い姿勢を見せていた宮だが、女を思いきれるわけではない。かといって振り上げた拳を早々に下ろすわけにもいかず、「つらしとも……」の歌で、女に下駄を預けてきた格好である。女も説明したいことはあるのだが、潔白を主張するにあたっては軟化することもできない。女の返歌はさらにその下駄を投げ返したものと理解すべきである。

【角川】は、「女は一転して宮の歌への反駁をやめ、一步引いた歌を贈った」という理解を示すが、歌の内容としてはむしろ逆であろう。

17・と聞こえさするも、なほ間遠になむ。互いに状況を打破できず、しばらく二人の交流は絶たれることとなる。係助詞「なむ」での文の終止は、「ある」「ありける」などの省略が想定されるところ。

18・月の明き夜、うち臥して、「うらやましくも」などながめらるれば、宮にかうぞ聞こえける。「うらやましくも」は、諸注一様に、「かくばかりへがたく見ゆる世の中にうらやましくもする月かな」(拾遺集・四三五・雑上・藤原高光／拾遺抄・五〇〇・雑下／和漢朗詠・七六

五・述懐／高光集・三五」を踏まえるとする。「すめる」には「住」と「澄」が掛けられている。厭世観にとらわれた詠者が、曇りなく天空に確とした位置を占め照り輝く月を、自己とひき比べて羨望するというのが歌の主意。ここでは宮に疑われ、今後の恋の行方を不安視せざるを得ない女の心情が重ね合わされ想起されたもの。「眺めらるれば」は、底本「なかくめしるれば」、書陵部本「なかくめしらるれば」。応永本はこの部分、系統内部で異同が見られる。底本は「ら」を脱したか、「ら」を「し」と誤写ないしは見誤ったか。三条西本・寛元本は「ながめらるれば」。これらにしたがい改める。ここでの「らるれ」は自発の助動詞で、「思わず眺めてしまふ」「眺めずにはいられない」の意となる。「かう」は、底本「こう」。指示語の副詞「かく」のウ音便化と思われるが、その場合、表記としては「かう」となるのが普通。応永本の独自異文になるが、同系統内でも「こう」表記と「かう」表記とで対立がある。ここでは、歴史的仮名遣いにしたが、「かう」と改めた。

19・月を見て荒れたる宿にながむとは見に来ぬまでも誰に告げよと 女の歌。第二句「荒れたる宿」は、「わがやどは道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに」（古今集・七七〇・恋歌五・遍照）などをはじめとして、恋歌では孤閨をかこつ女を象徴するモチーフ。第三句は寛元本「なかむれは」。三条西本は応永本と一致。「見に来」ること、すなわちあなたの来訪を期待はしないけれども、自分の孤独・寂寥を伝える相手はあなたしかいないのだというのが歌の主意。『和泉式部集I（正集）』二二〇にも載る。詞書「月のあかき夜、人に」。第三句が寛元本に一致する。第五句「誰に告げよと」は、文脈的に「あなた以外に告げるべき人、告げたい人はいないのだ」の意になる。

20・樋洗童して、「右近の将監にさし取らせて来ね」とて遣る。「樋洗童」は、樋箱（便器）の洗浄を主業務とする女性の召使。辞書類では「少女」と説明されるが、「小舎人童」同様、「童」は身分の概念で年齢を表すものではない（『注釈稿（1）』の（1））。後文で、童と親しい関係にあつたらしいことが語られる。作品内では直接的に描かれないが、両者の交流が女と宮の関係に、情報交換や下交渉といった形で影響を及ぼしている事情が読み取れる。「して」は、手段・方法・使役を表す格助詞。「さし取らせ」の「さし」は接頭語で、語勢を強める働き。

「来ね」の「ね」は、完了・強意の助動詞「ぬ」の命令形、念押しするニュアンス（「ちゃんと」「きちんと」）を表現する。

21・宮は、御前に人々して御物語しておはしますほどなりけり。樋洗童が宮邸に手紙を届けた時点において、宮が御前に人々を集めておしゃべりをしていたとの意。「人々」がどの程度の人数、どのような人々なのかは判然しないが、終末部、正月一日の記事において、「御送りに上達部数を尽くして御遊びなどあり」といった叙述があり、本項目の叙述と相俟って、本作品における宮（敦道親王）は人望厚い人物という印象を与える。なお、本稿（8）で示したように、本作品独特の日次の乱れを考慮するなら、本場面は、実際には六月中旬から下旬の記事

と思し、さらに実在の和泉式部・敦道親王に照らして考えるならば、本場面の記事は、前年六月に死去した為尊親王の一周忌前後の時期に該当してくる。「人々」との「御物語」は、宮が為尊一周忌に関わる何らかの相談をしていたことを暗示する叙述であるとも考えられる。

22・まかでなどして入らせたまふに、右近の将監さし出でたれば、「まかづ」は「行く」「出づ」の謙譲語で、主語は「人々」。「入らせたまふ」の主語は宮である。「御物語」が終わって、「人々」が宮のもとから退出し、宮が自室にお入りになると、すかさず右近の将監が宮のもとにやって来るといふ流れ。直接の描写はないが、この時点で宮は女からの手紙を右近の将監から受け取って読んでいることになる。

23・「例の車に装束せよ」としておはします。「例の」は副詞で、「いつものように」の意。宮は右近の将監に車の支度をするよう指示し、女のもとに向かう。「装束」は、飾りのことを指すが、ここは「やつす」方向の飾りであろう。この部分、三条西本・寛元本は「装束せさせよ」とあるので、右近の将監に対して、さらに下位の召使に車の準備をさせるように命じる口吻である。

（松島 毅）

付記 校正は、國學院大學北海道短期大学部開講科目「日本文学演習B」の受講生の協力を得て行った。受講者は、阿部和志、石原泰晴、田上勝翔、仁木海道、林琴子、宮原芽果の6名である。

